

## 元刊雜劇の研究（七）「李太白貶夜郎」全訳校注（後篇）

① 赤松紀彦・金文京・小松謙・佐藤晴彦・荀春生・  
② 高橋繁樹・高橋文治・竹内誠・土屋育子・松浦恆雄

本稿は元刊本雜劇研究会の成果に基づくものである。各担当者の原稿をもとに、討論の内容により修正を加えた。全体のまとめは小松が担当した。なお、「元刊雜劇の研究」(一)～(四)は『元刊雜劇の研究』——三奪槩・氣英布・西蜀夢・單刀會』として、二〇〇七年汲古書院より刊行されており、(五)は本校注の前篇として本学術報告前号に、(六)は「晋文公火燒介子推」全訳校注(前篇)」として『佐賀大学文化教育学部 研究論文集』第十四集第一号にそれぞれ掲載されている。

凡例

① 異体字・俗字も含め、本文の用字については、明らかな誤字・略字も含めて、ひとまず元刊本にできるだけ忠実な字を用い、その上で校勘を加えている。

② 押韻箇所は「」、韻を踏まない区切れの箇所は「」で示した。「△」は句中藏韻(一句の中で更に韻を踏む字があるもの)を示す。

③ 明らかに字の誤りと思われるものについては、( )内に正しい字

と思われるものを付け加えた。ただし、白話文学の世界で史書とは異なった文字が通常用いられている場合には、改めることはせず、注で指摘するにとどめた。また、誤字であることは確かだが、正しい字を定めがたいものについては、原文のままとした。原テキストには存在しないが明らかに脱字があると考えられる場合には、《》に入れて補うかたちを取った。また明らかに衍字と思われるものには《》を付した。

校勘に使用したテキストは、鄭騫『校訂元刊雜劇三十種』(世界書局一九六二。鄭本と略称)・徐沁君『新校元刊雜劇三十種』(中華書局一九八〇。徐本と略称)・寧希元『元刊雜劇三十種新校』(蘭州大学出版社一九八八。寧本と略称)である。本劇の伝存テキストは元刊本のみで、異本は存在しない。

なお字体は、原文・引用・人名は繁体字、他は新字を使用した。

《第三折》

〔祿山、旦云了〕「外宣未了」「正末扮帶酒上了」

【粉蝶兒】只被宿酒禁持。轟騰殺浩然之氣。幾曾明白見一个烏兔西飛。

今日醉鄉中、如混沌、初分天地。恰办得个南北東西。被子規声喚回春睡。

〔校〕○办……各本とも「辨」に改める。

〔注〕○禁持……つきまとうこと、またつきまとうて苦しめること。「牆頭馬上」(古名家本)第二折「一枝花」「睡魔著未得荒、別恨禁持得煞(睡魔にひどくとりつかれ、別れの悲しみ激しくつきまとい)」など。○轟騰……通常は謝翱「上之回」「鳴鸞在鑣、士飽力。桴鼓轟騰、罕山

北(くつわには鸞、士は力にあふれ、罕山の北に太鼓を打ち鳴らす)」とあるように、大いに盛り上がることであり(「関騰」「烘騰」などと通じるか)、詩文などでよく用いられる。ただここにはあまり合わず、

【宋元語言詞典】などはこの箇所をあげて「轟騰殺」は「攪盡、散盡」の義とするが、挙例はこれのみで、實際他にそのような例は見つからない。あるいは「浩然の気がすっかり盛り上がってしまった」と皮肉な口調で述べているか。○浩然之氣……『孟子』『公孫丑上』の「我知言。我善養吾浩然之氣(私は言葉について知っている。私は浩然の氣を養うことに長けている)」に基づく。第一折【混江龍】に「歐陽浩氣」という句があった。○烏兔西飛……日月を烏と兔にたとえる表現は古くから見えるが、詞曲については周邦彦の【留客住】詞に「嗟烏兔。正茫茫、相催無定、只恁東生西没、半均寒暑(嘆かれるのは日月の、果てしも知らずとどまることなくせき立てて、かように東に生

じ西に没して、寒暑半ばに分かつこと)」の影響が強いものと思われる。

ほぼ同時代の例となるが、元の洪希文の【桃源憶故人】「別故人」詞(續軒渠集)卷九)には「男兒得意須回首。烏兔東飛西走。臨發不堪分手。戀戀君知否(男子たるもの思うがままなる時こそ振り返らねばならぬ。烏と兔が東西に飛びはせ時は過ぎゆく。旅立ちに当たって別れるに忍

びず、離れがたき思いを君知るや)」と類似した表現が見える。○子規……ホトトギスが詩の題材となるのは、基本的には盛唐以後のことに属する。ホトトギスを「子規」と呼んでその声が夢から目覚めさせるとする例としては、唐の徐寅の「愁」詩に「黃葉落催砧杵日、子規啼破夢魂時(黄葉が散るのにせき立てられるかのように砧を打つ日、ホトトギスの鳴き声に夢が破られる時)」と見えるのが古い例であり、「春夢」と結び付けた例としては韋莊の【酒泉子】の「月落星沈。樓上美人春睡、綠雲傾、金枕膩、畫屏深。子規啼破相思夢、曙色東方纔動。柳煙輕花露重。思難任。(月は落ち星は沈み、高殿の美人は春の眠りに、雲なす緑の髪を傾け、金の枕はなめらかに、屏風深きところ。ホトトギスの声に恋の夢断ち切られ、曙の光東方に浮かびはじめた折しも、煙なす柳の葉は軽やかに、花の露は重く、やり場なきこの思い)」、連用の例としては宋の劉辰翁【摸魚兒】詞の「子規聲斷長門曉、春夢不堪重做(ホトトギスの声が長門宮の暁を断ちきり、春の夢をもう一度見ることもなりかねる)」がある。

〔訳〕「祿山と旦がいう」「外、末を呼ぶ」「正末、酔って登場」

二日酔いにたたられて、浩然の氣も盛り上がりすぎてしもうた。日や月が西へと動くをしかと見たこととてありはせぬ。今日も酔郷のう

ち、混沌の中より天地初めて分かれた時のよう。ようやく東西南北がはっきりしてきた折しも、ホトトギスの鳴き声に春の眠りから呼び覚まされた。

【醉春風】一壁恰空得錦袍干、又酒淹得衫袖濕。半醒時猶透頂門香、不喫時怎由得你。二（你）。就闌得半世无成、非是我一心偏（偏）好、子為你滿朝皆醉。

〔校〕○空……鄭・寧本は「控」、徐本は「烘」に改める。

〔注〕○空得錦袍乾……「空」を鄭・寧本は「控」に改め、寧本は「鞭打單雄信」（脈望館抄本）第二折の「某洗了這馬也。你將這馬牽在岸上、控的乾了回營中去（この馬を洗ったぞ。おぬしはこの馬を岸に引いていつて乾いたら陣營に帰れ）」などの例を引いて、「控」は自然に乾かすこととする。徐本はおそらく火にあぶって乾かすという方向で「烘」に改める。「空」でも意味は通るが、次句との対から考えて動詞でなくてはならず、とりあえず鄭・寧本に従って訳しておく。なお「錦袍」については第一折【油葫蘆】の注を参照。○衫袖濕……宋の王安中の【小重山】詞（沈蔚の作ともいう）に「椽燭垂珠清漏長。醉黏衫袖濕、有餘香（垂木のともしびは珠を垂らして夜も更け、酔って袖はべったり湿り、残り香がする）」とあるのがよく知られており、次句から見てもこれを踏まえるものと思われる。【雍熙樂府】卷二に見える【端正好】「馬踐楊妃」（岳伯川の「羅公遠夢斷楊貴妃」の一折という）の【滾繡毬】に「恁那里醉醺醺酒淹濕宰相春羅袖（あんたたちの方ではぐでんぐでんに酔っぱらって酒が宰相の袖を湿らせていよう）」とある。○透頂

門香……「遇上皇」（元刊本）第一折【混江龍】に「喜的是兩袖清風和月偃、一壺春色透瓶香（好きなのは両の袖に清風受けつつ月の光浴びて横になり、とっくり一杯に春色透瓶香のうま酒のかぐわしいこと）」と見える「透瓶香」という酒の名をもじったものである。この酒は、『水滸伝』（容與堂本）第二十三回で武松が酒を飲むくだりに「我這酒叫做透瓶香、又喚做出門倒（うちのこの酒は「透瓶香」、またの名「出門倒」と申します）」と見え、明の宋詡の『竹嶼山房雜部』卷十六には「蜜醞透瓶香」という酒の製法が記されている。○半世无成……南宋の姜特立の「和趙太中覓詩」（『梅山續藁』卷四）に「每嘆學詩如學仙、未能換骨謾成篇。翰林萬丈光常在、著作三都賦蚤傳。半世無成負便腹、終年有味聳吟肩。明珠何事輕彈雀、多謝高情未棄捐（いつも嘆くのは、詩を学ぶのは仙道を学ぶようなもので、換骨奪胎できぬまま適当に作品を作ること。翰林（李白）の万丈の輝きは不滅、著作（左思）の「三都賦」は早くに伝わったもの。半生なしとげたこととてなのまま腹ばかり出てはきたが、年中感じることあつて詩人の肩をそびやかす。真珠で軽々しく雀を撃つ如くもつたいなくも詩を頂戴してしまい、お見捨てなきに厚情まことにかたじけない）」とあり、李白に言及していることから考えてもこの詩を踏まえるのであろう。○滿朝皆醉……周豊の『詠史詩』「屈原」に「滿朝皆醉不容醒、衆濁如何擬獨清。江上流人眞浪死、誰知浸潤悞深誠（朝廷すべてが酔いしれて醒めることもならぬ時、皆が濁る中どうして一人清んだままでいようとする。江のほとりの流され者はまことに犬死にというもの、時をかけての讒言が深い誠を台無しにしようとは）」とあり、白話文学

への影響力から考えて、これを踏まえる可能性が高いであろう。

〔訳〕錦の上着がようやく乾いたと思つたら、またまた酒で袖をぬらして湿らせてしまった。半分がた酔いがさめてもまだ脳天からしみだすその酒の香、飲むまいとも思うままになりはせぬ。おかげで半生なしとげたこととてありはせぬが、わしだけが好むというわけではなく、おまえのせいで朝廷ごとごとく酔いしれておるわ。

【迎仙客】比及沾雨露、恨不得吐虹霓。滄海倒傾和月吸。向翠紅鄉、圖書里。不設着《歌》舞筵席。枉辜負了遲日江山麗。

〔校〕○この曲は『太和正音譜』に取られている。○向……『太和正音譜』にこの語なし。○不設着舞筵席…各本とも「舞」の前に「歌」を補う。『太和正音譜』は「若不設歌舞筵席」とする。○了……『太和正音譜』にこの語なし。

〔注〕○虹霓……「吐虹霓（虹を吐く）」は、詩人が名句を吐くことをいう常套表現だが、ここでは趙令時『侯鯖録』卷六（『唐語林』卷五にもあり）に「李白開元中謁宰相、封一板。上題曰、海上釣鼈客李白。相問曰、先生臨滄海釣巨鼈、以何物爲釣緝。白曰、以風浪逸其情、乾坤縱其志、以虹霓爲絲、明月爲鈎（李白は開元年間に宰相に面会し、名刺を差し出した。そこには「海上にて鼈を釣る客李白」とあった。大臣がたずねるには、「先生は海のほとりで大スツポンを釣られるそうだが、何を針と糸にされるのかな。李白は答えた。「風波もて情をかからせ、天地にて志を思うがままにし、虹を糸、明月を針といたします）」とあるのを踏まえるのかもしれない。○和月吸……北宋の毛

滂の「新酒熟奉懷曹使君」に「欲留一斗向吳興、何日南樓和月吸（一斗残して吳興に向かい、いつの日にか南樓にて酒をば月の光もろとも吸うとしよう）」以下、用例が多い。○翠紅鄉……許有壬の「寄趙伯寧中丞」詩に、「走馬灤京獻納來、翠紅鄉裏得徘徊（馬走らせて上都まで貢物届けに来てみれば、翠紅の郷をさまようことができました）」とあり、ここでは単に花が咲き乱れる美しいところかと思われるが、元曲では「灰闌記」（元曲選本）第一折【混江龍】に「再不去賣笑追歡風月館、再不去迎新送舊翠紅鄉（笑みを買って飲ぶ求める風月の館には二度と行くまい、旧きを送って新しきを迎える翠紅の郷には二度と行くまい）」とあるように、多くは妓楼をさす。○圖書裏……杜甫「即事」詩に「飛閣卷簾圖書裏、虛無只少對瀟湘（高い樓閣にすだれを巻けば絵の中の如く、何もなく広がる景色は瀟湘が足りぬのみ）」とあるのを踏まえるか。○遲日江山麗……杜甫「絕句」二首之一「遲日江山麗、春風花草香。泥融飛鷺子、沙暖睡鴛鴦（日は長く江山うるわしく、春風のもと花草かおる。泥とけて燕は飛び、砂暖かき中鴛鴦は睡る）」の初句。この詩の末句の意を受けて、楊貴妃と安祿山密通のことをひそめるか。

〔訳〕天子さまのご恩にあずかるとなれば、是非とも虹の如き言葉を吐いて、青海原をそっくり月もろともに吸い込みたいもの。花咲き乱れるめでたきところ、絵の如き景色の中で、歌舞の宴を催さぬとあっては、春の日に山も川もうるわしいこの時節に申し訳ないと申すもの。

【醉高歌】脚列起登輦路花基。神恍惚步瑤塔玉砌。吐了口中涎、按捺

定心頭氣。勉強山呼万歳。

〔校〕○列起…徐・寧本は「趺起」に改める。

〔訳〕よろよろと模様のついた天子さまのお車通るお成り道をのぼり、うつらうつらと珠のきざしを歩む。口の涎を吐きだして、心中の怒りを抑え、無理して万歳となえる。

〔正末失驚了〕

〔石榴花〕疑恠翠杵（盤）人用錦重圍。不听得月殿樂声齊。枉（往）常恐東風吹与外人知。怎想這里。泄漏天機。知他那搗兒醉倒唐皇帝。空有聚温泉一派香池。又无落花輕泛波収（紋）細。怎生慢走到武陵溪。

〔校〕○翠杵…徐・寧本は「翠盤」に改める。○枉常…各本とも「往常」に改める。○波收…各本とも「波紋」に改める。

〔注〕○翠杵…徐本は校記に「按…「杵」爲「盤」異體字。「翠盤」指楊貴妃的盤舞（「杵」は「盤」の異體字である。「翠盤」は楊貴妃の盤舞を指す）」とある。「盤舞」とは皿を持って舞うものであるが、やはり徐本校記が引く「梧桐雨」（古名家本）第二折に「〔高力士云〕

…請娘々登盤演一回霓裳之舞…」（快活三）囑付你仙音院莫怠慢。道與你教坊司要迭辦。把箇太眞妃扶在翠盤間。快結束宜宮扮（高力士がいう）…お妃様、盤に登って霓裳の舞いをご演じください。

…〔快活三〕仙音院よ、ぐずぐずするな。教坊司よ、準備せよ。太眞妃を手助けして翠盤にのせよ。早く身仕舞いと化粧せよ」とあるように、楊貴妃が翠盤に乗って霓裳羽衣の曲を舞ったと考えられていたようであり、〔天寶遺事諸宮調〕「明皇擊梧桐」の【公篇】にも「動

一派簫韶飲玉鍾。把貴妃攔斷在翠盤中（めでたき調べ奏て玉杯に飲み、

翠盤の中なる貴妃にあわせよ（?）」と見える。同様の例は元曲には多いが、元以前の文献には見られず、基づくところは不明である。ただ、楊維禎「題楊妃襪」詩にも「塵垢翠盤思亂滾、香粘金鏡憶微兜（塵に汚された翠盤にかつての激しい踊りを思い、香の残る金のあぶみにそつと脚を入れたことを思い出す）」とあることから、元末にはすでに詩文の典故として用いられるようになっていたことが分かる。明代以降もこれを踏まえた詩文が多く認められ、また『歴代題畫詩類』巻四十四に明の謝承舉が「楊妃舞翠盤圖」に題した詩が見えるところからすると、あるいは画題として発展してきたものなのかもしれない。

○用錦重圍…『天寶遺事諸宮調』「楊妃出浴」【醉花陰】にも「膩水流清漲新綠。洗盡胭脂粉聚。斗障錦重圍、只恐東君、窺見濃勻處（なめらかな水の流れば清んで新緑の色をみなぎらせ、紅白粉を洗い流す。とぼりの錦で幾重にも囲むのは、春の神なる東君が、色濃きあたりをうかがい見るのを恐れるゆえ）」と見える。○月殿樂声齊…霓裳羽衣の曲は、玄宗が月に赴いて聴いた曲の再現とされる。玄宗が月に行つたことについては、第二折【醉太平】の注を参照。このことは『天寶遺事諸宮調』「月宮舞」「明皇喜月宮」などにも見える。先に引いた徐本校記は、「揚州夢」（古名家本）第二折【滾繡毬】「這樓恰便似看翠盤内霓裳到月宮（この樓閣はさながらに月宮に至りて翠盤の中なる霓裳の曲舞を見るが如し）」を引き、後句の「月殿樂聲齊」との関連を述べる。○東風吹…この語は、李白自身も「江夏贈韋南陵冰」詩で「西憶故人不可見、東風吹夢到長安（西のかたなる友を思えど会うことも

かなわず、東の風に長安へと夢を吹き送ってもらおう。」以下四度にわたって用いており、詞では右の李白の詩なども踏まえつつ更に頻用される。ここでは楊貴妃と安祿山の密事が人に知られることをいっており、馮延巳「虞美人」詞の「春風拂拂橫秋水。掩映遙相對。祇知長作碧窗期。誰信東風吹散、彩雲飛（春風がさわさわ、秋の水の如きまなざしを向ければ、遙か向こうに見え隠れするよう。碧の窓のもととこしへの契りと思つたのに、東の風に吹き散らされて、彩雲飛び行くこととなろうとは）」を踏まえているかもしれない。○武陵溪……いうまでもなく桃源郷のこと。ただし、おそらく王子一の雜劇「悞入桃源」と同様、劉晨・阮肇の故事とからめて、男女の結びつき、つまり楊貴妃と安祿山のことを暗示する。最後の三句で「浮かぶ花のような楊貴妃がないのだから、めでたい温泉があるのも無駄なこと、花の如き楊貴妃は桃源郷にて密会中、そこに迷い込んでしまった」と花の連想で続くのであろう。ここで二人の密会に出くわすものと思われる。「悞入桃源」という言い回しが劉禹錫の「桃源行」以来頻用されるのに対し、「悞入武陵」は宋の李綱の「遊仙溪」詩に「杳如悞入武陵去、落花流水山重重（遙かなること誤りて桃源に入るかの如く、落花流水山はたみならず）」が最初のものである。『天寶遺事諸宮調』「十美人賞月」【寄生草】にも「恰便似錦池捧出芙蓉面。只疑是武陵泛出桃花片（さながらに錦池に芙蓉の顔をのぞかせたかの如く、武陵より桃の花びらの漂い出たかと疑わる）」と見える。

〔訳〕「正末、驚く」

もしや翠の大皿に載って舞われる方は、錦に幾重にも囲まれてでも

おられるのか。月宮にて音をそろえて奏でる響きが聞こえぬが。いつも東風吹いて人に知られることを心配しておられたが、よもやここでとんだ秘密がばれようとはな。唐の皇帝さまはどちらで酔いつぶれておられるやら、温泉湛えた一面のかぐわしい浴池があるのも空しいこと、波紋細やかな水面にそっと浮かぶ散りし花とてないものを。どうして武陵の溪流にまで迷い込んでしまったのやら。

〔外末、旦做住了〕「外末同旦与正末礼了」不想如此。

【鬪鶴鶉】恰才个倚翠偎紅、揣与个論黃數黑。子他行怕行羞、和我也面紅面赤。誰大兩白日、細看春風玉一團（圍）、却是甚所為。更做个抱子携男、末不忒回乾就濕。

〔校〕○大……徐・寧本は「待」に改める。○一團……各本とも「一圍」に改めるが、いずれも校記を付さない。○抱子……鄭本は校記で「子疑當作姪、用魯義姑故事（「子」は「姪」とすべきではないかと思われる。魯義姑の故事を用いているのであろう）」とする。○末不……鄭本は「莫不」に改める。

〔注〕○外末、旦做住了……第一折の外末は高力士だったが、ここでは安祿山であろう。外（外末・外旦）は複数いるのが普通である。このト書きは、安祿山と楊貴妃が密会しているところを押さえられて驚く一連の動作を指すか。○倚翠偎紅……翠の柳と紅の花によりそう、つまり花柳界に遊ぶこと。北宋の祖無擇「戲別申申堂」詩に「翠柳和煙籠碧沼、紅芳如火照諸鄰。主公欲去寧無戀、倚翠偎紅屬後人（けぶるが如き翠の柳は靄もろともに碧の沼を包むよう、紅の花は火の如く

回りを照らす。殿にはお発ちに当たつて未練がないわけにもいくまいが、翠と紅によりそうことは後の者にお任せあれ」とあり、また柳永の有名な【鶴冲天】詞に「且恁偎紅翠、風流事、平生暢。青春都一餉。忍把浮名、換了淺斟低唱（ともあれかように花柳に寄り添うて、色の道を思うがままにしよう。青春はひとときのもの、つまらぬ名声など、そつと酒くみ小声で唱う楽しみにひきかえようと構うものか）」と「偎紅翠」という形で見える。詞での用例は多くはない（一般に「偎紅倚翠」という形を取る）が、元曲では【西廂記】（弘治本）卷三第三折【離亭宴帶歇指煞】「強風情措大晴乾了尤雲殢雨心、悔過了竊玉偷香膽、刪抹了倚翠偎紅話（岡惚れのインテリさん、雲よ雨よという気持ちを晴らし、玉や香を盗む気持ちを改めて、柳や花によりそおうというセリフは削つておしまいなさい）」など用例は多い。○細看春風一團……各本とも「一團」に改めているが、特に校記は付していない。南宋の劉子翬の「酴醿」四首之三に「獨立幽亭晚、春風玉一團。殘英不着地、去作嶺雲飛（人気がなきあずまの夕景に独り立ち、春風のもと玉の如き一本の樹。散りゆく花は地に落ちず、嶺に掛かる雲となつて飛ぶ）」とあるのに基づくものと思われ、「一團」とするのが妥当である。元の趙文の「太眞入宮圖」二首之一（『青山集』卷八）に「未舞霓裳寶髻斜、流蘇帳裏再盤鴉。君王細看春風面、終是香雲減一些（霓裳の曲を舞わぬうちからまげは斜めに乱れ、房飾りのあるとぼりの中で髪を整える。みかどが春風のかんばせをよくよく見たまえば、やはりかぐわしき雲の如き容色も少しやつれた様子）」とあり、趙文が南宋末から元にかけて活動した宮天挺の同時代人であることから考え

て、この詩を意識している可能性もありそうである。○抱子携男……鄭本が「抱姪」の誤りで『列女伝』の魯義姑の故事を踏まえているのではないかとするのは、状況が合致するからであろうが、ここでは前後同様楊貴妃と安祿山の義母子関係をあてこすつてゐるものと思われ、「子」のままでもよいであろう。○回乾就濕……母が子供を乾いたところに寝かせ、自分は湿ったところで我慢すること。仏教經典に用例が多く、敦煌變文でも「父母恩重經講經文」に「慈母德、實堪哀、十月三年受苦災、冒熱衝寒勞氣力、廻乾就濕費心懷（慈母の徳は、げにも哀れなもの、十月三年苦難を忍び、暑さ寒さにもめげず気力をつくし、乾いた場所を譲り湿った場所に行つて気をつかう）」と見える。〔訳〕「外末（安祿山）と旦（楊貴妃）のしぐさ」「外末・旦、正末にあいさつをする」こんなこととは思ひもよらなうだ。

ちようどしつぽりお熱いところに、あれこれうるさい議論を押しつけてやろう。あちらは心配するやら恥ずかしいやら、このわしまでが赤面するわ。この昼日中に、春風の如き玉のかんばせじっくり拝むことになろうとは思ひもかけなんだ。いったいどういうことですか。息子のだつこするにせよ、ちと甲斐甲斐しすぎはいたしませぬか。

「力士云了」「一同与正末把酒了」「末笑科」

【普天樂】不須你沈郎憂、肖（蕭）郎（娘）難易。就未央宮擺布樽疊。直喫的尽醉方歸。折末藏着劔鋒、承着機密。漢國公（功）臣臻二（臻）地。來二（來）喫一回呂太后筵席。穩便波鸞交鳳友、休憂波鶯兒燕子、休忙波蝶使蜂媒。

〔校〕○肖郎難易……鄭本は「蕭郎難易」、徐本は「蕭娘嬪」、寧本は「蕭娘疑」とする。○公臣……徐・寧本は「功臣」とする。

〔注〕○沈郎……宋の王楙の『野客叢書』卷二十七「東陽沈隱侯」に「又詩詞有沈腰清瘦之語。僕又考之、約之曰曰、老病百日、數旬革帶常移孔。以手握臂、計月小半分。於傳文初無腰瘦之語。詞蓋述其意爾（また詩詞に「沈腰清瘦」という語がある。これについても考察してみると、沈約の言葉には「老い病むこと百日、数十日の間、革帯の穴はほとんどん移動して、手で腕を握ると、一月で半分になってしまいました）」〔南史〕卷五十七「沈約傳」に見える徐勉あての書翰。一部文面が異なる）とあるが、沈約の伝には「腰瘦」という言葉は元来存在しない。詞はおそらくこの内容を敷衍したのであろう」と論じる。早くは唐の殷堯藩の「友人山中梅花」詩に「南國看花動遠情、沈郎詩苦瘦容生（南國に花を見て遠くのことを思い、沈郎は詩作に苦しんで痩せてしまった）」と見え、蘇軾にも「次韻王鞏顔復同泛舟」詩の「沈郎清瘦不勝衣、邊老便便腹十圍（沈郎は痩せて衣を着るのもつらげだが、邊老はぶくぶくと腹の回りは十圍もある）」とあるが、ここでは、南唐の中主李璟の『浣溪紗』「風壓輕雲貼水飛。乍晴池館燕爭泥。沈郎多病不勝衣（風は軽やかな雲を押しえつけて水近きところを飛ばせ、池のほとりの館は晴れたばかりで、燕が泥を争う。沈郎は多病にして衣の重みにも耐えかねる有様）」以来、詞の世界でやつれた色男の描写として用いられてきたものを踏まえるのであろう。安祿山に対してこの語を用いるのが皮肉であることはいままでもない。○蕭郎……『雲溪友議』卷上「襄陽傑」に見える崔郊の詩「侯門一入深如海、從此蕭郎是路人（貴族の

館は一度入ってしまったえば海よりも深く、今後蕭郎は行きずりの他人も同じ）」が名高く、「侯門一入深如海」は元曲でも頻用される典故となっており、「蕭郎」の用例も多いが、ここでは「沈郎」の対である以上、徐・寧本に従って「蕭娘」に改めるべきであろう。この語は、『南史』卷五十一「臨川靜惠王宏傳」に、蕭宏の怯懦さを嘲って北魏の軍が「不畏蕭娘與呂姥、但畏合肥有韋武（蕭ねえさんと呂婆さん（呂僧珍）など怖くはない。怖いのは合肥の韋武（韋叡）だけ）」と嘲ったという故事に基づくとも、隋の煬帝の蕭皇后が美女であったことに基づくともいうが、あるいは『玉臺新詠』卷五に范曄の「戲蕭娘」という詩があることと関わるものかもしれない。「鶯鶯傳」に引かれる楊巨源の「崔娘詩」の「風流才子多春思、腸斷蕭娘一紙書（色男の才子は恋情多きもの、蕭娘の一枚の手紙にはらわたもちぎれんばかり）」以下頻用される。ただ、次の「難易」は意味を取りがたい。ここは三字句であり、対になる句が「沈郎憂」であることから考えて、一字の動詞が来るべきであろう。仮に「嬪」とする徐本に従って訳す。○尽醉方帰……張炎の『鬪嬪媚』「春感」詞に「盡醉方歸去、又暗約明朝鬪草。誰解先到（とことん酔ってやっと帰るが、またこっそり明日の草相撲の約束。さて誰が先に來ることができるかな）」と見える句。○呂太后筵席……『史記』卷五十二「齊悼惠王世家」に見える「以軍法行酒」の宴会を踏まえた表現であろう。ただし『史記』では朱虛侯劉章が呂氏の一員を殺すだけであるが、『前漢書續集平話』では、この宴会自体が漢の大臣を殺すことを目的に開かれたものとされており、白話文学が踏まえるのはこの設定であろう。「殺狗勸夫」（脈望館抄本）第二



折【太平令】「喫的是親阿嫂の酒食。更過如呂太后的筵席（実の嫂の酒食を食べているというのに、呂太后の宴席よりひどい有様）」と見え、『水滸傳』（容與堂本）第二十六回には「前後共吃了七盃酒過、衆人却似吃了呂太后一千個筵宴（前後七杯を飲みましたが、一同はまるで呂太后の宴席に千回も出たようです）」とある。○鸞交鳳友……以下の三句は、特に詞で頻用される類型表現を用いている。元曲でも用例は多く、こゝとほぼ同じパターンの例としては、無名氏の【鬪鶴鵲】套「妓好睡」の【么】「推着倒鸞交鳳友、情人扶燕侶鶯儔、合着眼蝶使蜂媒（押せば倒れる鸞鳳の仲の方、人にやつと支えてもらう燕鶯の友、目を閉じて蝶や蜂に仲立ちさせたまま）」がある。「蝶使蜂媒」が仲立ちである点からすれば、あるいはその場にいると思われる高力士を指す可能性もある。史実に従えば高力士が楊貴妃と安祿山の仲立ちをしているとは考えがたいが、後の【哨遍】の内容からすると、この雜劇では高力士も二人に荷担している可能性がある。仮に仲立ちとして訳しておく。

〔訳〕ほっそり瘦せた色男殿ご心配なく、別嬪さんもぐつたりなさいますな。未央宮に酒樽並べ、とことん酔うまで帰りますまい。たとえ腹の中に劍の切つ先隠し、秘密を持っていようとも、漢の功臣ざらりと並ぶ、さあさあ呂太后の宴席にあずかりましょう。ご安心あれ、鸞鳳の如き仲良しのご兩人、ご心配なく、鶯燕の如く花の間に戯れるお二方、あわてたもうな、蝶や蜂の如き仲立ちの方。

〔正末云了〕〔外把盞了〕〔末云了〕

【干荷葉】來的盞不會推。有的話且休提。準備着明日。向君王行主意的緊支持。刁蹬的厮史及。被我連珠兒飲了三兩盃。則理會酒肉壇場喫。

〔校〕○壇……鄭本は「撞」、徐・寧本は「攤」に改める。○鄭本校記は第三句が格律に合わない指摘する。五字句が来るべきだが、このままでは二—三リズムの五字句にはなりえない。

〔注〕○刁蹬……「刁頓」「刁頓」とも表記する。わざと困らせたりかかったりすること。『董西廂』卷五【瑞蓮兒】「刁蹬得人來成病體（苦しめられて病身となり果てた）」など。○被我連珠兒飲了三兩盃……「連珠」は装身具の真珠を連ねたものことだが、立て続けに動作を行うことのためとして白話文学では頻用される。『七國春秋後集平話』卷上に「被王孫賈翻身射三隻連珠箭、掉齒落馬（王孫賈にふりむきざま立て続けに三筋の矢を射かけられて、掉齒は馬から落ちた）」と見える「連珠箭」などは用例が多く、「兩世姻緣」（顧曲齋本）第一折【寄生草】「嚮味味心窩裏中幾下連珠箭（心臓に立て続けにいくつか矢を食らう）」のような例もある。ここに見えるような酒を立て続けに飲む表現も定型化していたらしく、「汗衫記」（元刊本）第一折【油葫蘆】の「交連珠兒熱酒飲三樽（立て続けに熱燗の酒を三杯飲ませよう）」など複数の例がある。○酒肉壇場喫……徐本の校記が引くように、「諱范叔」（息機子本）第二折の須賈のセリフに「左右、將酒來。公子、嗜酒肉壇場喫、他王條依正行（これ、酒を持って。公子、我らについては肉は高いところで食べる、奴については王の掟は正しく行われる、と申すもの）」とあり、元曲選本では「常言道、酒肉攤場喫、王條依正行」と、「壇場」を「攤場」に改めた上でことわざとして引かれて

いる。「攤場」という表記を用いているのは「陳州糶米」のみであり、この雑劇の場合は元曲選本のみしかないことからすると、「攤場」と書くのは、臧懋循が賭場を意味するこの語に引かれて改めた結果である可能性は否定できない。従って、「壇場」という表記を改める必要はないであろう。『宋元語言詞典』『漢語大詞典』は「慢慢的」という語釈を与えているが、単に「高いところ」ということかもしれない。ここでは、表面に出ない次の句「王條依正行」を意識した歇後語的用法であろう。

〔訳〕「正末がいう」「外が盃を手取る」「末がいう」

まわされた盃は断りはせぬが、話だつたらとりあえずいわないでくだされ。明日に備えておくのじゃ、おぬしも君王の御前でしつかりと受け答えして、うるさく頼まねばならぬのだぞ。わしに立て続けに杯を空けさせて、ただ酒や肉を好きに食べさせればよいと思ひ込んでおるようじゃ。(だが王の掟は厳正に行われよう)。

【上小楼】這孩兒何曾夜啼。无些驚氣。嬌的不肯離懷、懶慵那歩、怕見独立。三衙家、遶定着、親娘扒背、兀的後宮中養軍千日。

〔校〕○那……各本とも「挪」に改めるが、いずれも校記を付していない。○遶……徐・寧本は「繞」に改めるが、校記は付していない。

〔注〕○三衙家……『宋元語言詞典』は、役所に「早衙・午衙・晚衙」という三回の勤務があったことから一日中という意味になったとするが、『漢語大詞典』は態度の大きい様やのろいさま、「三衙」は三度の義とする。「三衙家」と「三衙」で意味が違うとは考えがたく、「趙禮

讓肥」(内府本) 第一折【點絳脣】に「俺這囊篋消乏。物斛長價。憂愁殺。一日三衙。幾度添白髮(うちの財産はなくなり、物価は上がり、心配でならぬ。一日のうち、何度白髪が増えるやら)」などからすると、「一日中」というのが妥当かと思われる。「來生債」(元曲選本) 第一折【油葫蘆】「他可自三衙家不出那正堂門(彼は一日中母屋から出てこない)」ほか。○養軍千日……「灑池會」(内府本) 第二折の廉頗のセリフに「自古道、養軍千日、用在一朝(軍を千日養うのは、一朝事ある時に用いるため)」とあり、時代は下るが、明の李賢の「與趙都督書」にも「俗語云」としてこの語を引く点から見ても、よく知られたことわざだつたらしい。元刊本では「替殺妻」第四折【落梅風】にも「母親也早難道養軍千日(母上、軍を養うこと千日と申すものではありませんか)」という例があり、「用在一朝」を意識した歇後語的用法と思われるが、ここも安祿山が將軍であることを踏まえて、それが楊貴妃と密通するという役に立ったという皮肉であろう。

〔訳〕このガキがいつ夜泣きをしたというのじゃ。引きつけ起こす様子もないぞ。かわいいふりしておっかさんのふところから離れようとせず、けだるそうに歩みを進めれば、一人で立てるかど心配になる。一日中おっかさんにまわりついて背中によじ登る。後宮で千日も軍を養っておられたというものですな。

【么】穿了好的。喫了好的。盛比別人、非理分外、費衣搭食。甚時會、向人前、分明喘氣。他一身兒孝當竭力。

〔校〕○第三句から第五句……鄭本・寧本は「盛比別人非理。分外費

衣搭食。」とするが、四字三句に分けるのが妥當。

〔注〕○盛……「剩」に同じ。○向人前、分明喘氣……人前では息を切らせたことはない、というのは、つまり人の見ていないところで息を切らせるようなことをしているという意味であろう。○孝當竭力……『千字文』の「孝當竭力、忠則盡命（孝のためには力の限りをふりしほらねばならず、忠のためなら命を尽くすもの）」を踏まえる。ここでも対の句を踏まえた皮肉かもしれない。

〔訳〕いいものを着て、いいものを食べて、他の人より法外に、理不尽なほどに、衣食も贅沢。人前にはつきりと息切らしたこととてありはせぬ。全身これ孝行のため力を尽くすというやつじやな。

《云》力士、我只道官里宣喚、誰想如此。「且云了」

〔滿庭芳〕你心知腹知。宮中子母、村里夫妻。覷得俺唐明皇顛倒如兒戲。我不來這其間敢錦被堆二（堆）。得了買不語一官半職。做了个六証三媒。枉了閑眺氣。又道我虎（唬）嚇你酒食。怕悞了你愛月夜眠遲。

〔校〕○虎……徐・寧本は「唬」に改める。

〔注〕○心知腹知……「留鞋記」（息機子本）第一折【那吒令】にも「這件事。天知地知。這件事。你知我知。這件事。心知腹知。神知鬼知。口裏言、心中計。且休得泄漏了天機（このことは、天が知り地が知るばかり。このことは、あなたが知り私を知るばかり。このことは、心知腹知が知り、神が知り鬼が知るばかり。心中のはかりごとを、口でいってはみたが、ともあれこの秘密もらしてはなりません）」とあり、他人の知らぬ秘密のことと思われる。○村里夫妻……「雲窗夢」（于

小穀本）第四折【折桂令】に「我待學村里夫妻。歩、（歩）相隨（私は田舎の夫婦が、いつも一緒にいるのを見習いましょう）」とあり、「秋胡戲妻」（元曲選本）第二折【端正好】に「想着俺只一夜短恩情、空嘆了千萬聲長吁氣。枉教人道村里夫妻（思えば一夜限りの短い契り、空しくあまたの長いため息つくばかり。人から田舎の夫婦のようといわれるのもあだなこと）」とあるように、明らかに成語化しているようである。○如兒戲……『漢書』卷四十「周亜夫傳」に「文帝曰、嗟乎、此眞將軍矣。郷者霸上棘門、如兒戲耳（文帝がいった。ああ、これぞまことの將軍だ。さきの霸上や棘門の陣営は、子供の遊びのようなものじゃ）」というのに基づく。あるいは「眞將軍」の故事を踏まえるのも安祿山に対する皮肉かもしれない。○錦被堆……宋祁『益部方物畧記』の「錦被堆」の注に「花出彭州、其色一似薔薇、有刺不可玩。俗謂薔薇爲錦被堆花（彭州から出る。色は薔薇にとてもよく似ており、トゲがあつて手に取ることができない。俗に薔薇のことを錦被堆花という）」とあり、宋の陳景沂の『全芳備祖』前集卷二などによると、どうやら牡丹の一種らしいが、薔薇とも混同されるようである。ここでは、表面的には花が咲いているといいつつ、その裏に錦の掛け布団が重なっているという意味を寓しているであろう。玄宗が蜀に落ち延びることを考え合わせれば、この花が蜀のものであることも関係するのかもしれない。○買不語……徐本の校記が述べるように、「看錢奴」（息機子本）第四折の小末のセリフに「一匣子金銀與父親買不語（金銀を一箱お父さんにあげて口止め料にしよう）」とある例からも、代償を払って口止めすることと思われる。○六証三媒……「三媒六證」

の形で出ることが多い。「老生兒」（醉江集本）の卜兒のセリフに「我當初這劉家三媒六證、花紅羊酒、行財納禮、娶到你這劉家門裡做媳婦兒來（そもそのはじめに、この劉の家から仲人立てて、結納の品を用意して、結納のお金も出して、私をあんたのこの劉の家の嫁にしたんじゃないの）」と見えるように、婚姻の際、仲人や証人を入念に用意すること。○愛月夜眠遅……南宋の胡仲弓の「宮詞」十首之九（葦航漫遊稿）卷四）に「報道太清歌未徹、何妨愛月夜眠遲（太清の歌もまだ終わらないとのことだから、月を愛でて夜の眠りが遅くなったとて構うまい）」と見えるが、南宋の林希逸の「省題詩」や元の鄭奎の妻の詩とともに「愛月夜眠遅」という題が見え、また詞牌にも「愛月夜眠遅」がある（ただし『高麗史』『樂志』に一例のみという）という点、また胡仲弓の「宮詞」も中に詞牌名を織り込んでいる点から見て、詞牌にも用いられる決まり文句だったのであろう。元曲にも「陳搏高臥」（元刊本）第三折【倘秀才】「休想我惜花春起早、愛月夜眠遅（わしが花を惜しんで春は早起き、月を愛でて夜の眠りが遅くなるなどと思いたもうな）」など用例が多い。

〔訳〕「正末いう」高力士、天子に呼ばれたとばかり思っておったら、こんなこととはな。〔且がいう〕

おぬしは自分でわかっておるのだらう。宮中の母子といいつつ、村の夫婦同様の熱々の仲じゃ。我が玄宗皇帝を見戯のように見なしておる。わしが来なかつたらそのときはこきとと薔薇の花盛り（錦のふとんをうすぐたく重ねていた）だったことだらう。口止め料にちよつとした官職でももらって、仲人つとめろというが、それもむだなあが

きよ。わしが脅しをかけてたかろうとしていると申すか。さても月を愛でて夜更かしするおぬしの逢瀬の邪魔立てしてはと気がかりでな。

〔正末做出殿科〕「外扯住了」「外將荔枝上了」「外央正末喫科」「未取物羊（籤）科」「云了」我本大羊（籤）一个來、却羊（籤）着你两个。  
【快活三】沾沾（粘）着不摘離。厮胡突不伶俐。尽壓著玉枝漿、白蓮釀、錦根醅。官里更加上些忍辱波羅密。

〔校〕○正末做出殿科……徐本は「正末」を欠く。単なるミスか。○羊……鄭・徐本は「籤」、寧本は「簽」に改める。○大……各本とも「待」に改める。○云了……徐本のみ「了」を削る。○粘……徐・寧本は「粘」に改める。○錦根……鄭・徐本は「錦橙」に改めるが校記は付さない。「橙」と「根」が事実上異体字といつてよい関係にあるためであらう。寧本は「金橙」に改める。○波羅密……徐・寧本は「波羅蜜」に改める。〔注〕○以下の二曲は全体に表面は荔枝のことをうたいつつ、裏に安祿山と楊貴妃のことを伏せている。訳文では表面の意味の後に、（）内に裏の意味を書き添えることにする。○沾沾……徐・寧本が改めるように、「沾粘」の誤りであらう。徐本の校記が引くように、張可久「醉太平」【無題】に「水晶環入面糊盆。才沾粘便滾（水晶の指輪をどろどろの小麦粉のたらいに入れれば、くつついたと思つたらすぐに転がってしまふ）」に見える「粘りつく」という意味から転じて、沙正卿の【鬪鶻鷄】套「鬪情」の【么】に「方信道相思是歹證候。害的來不明不久。是做的沾粘、到如今潑水難收（やつとわかつたことは、恋とはつらい病で、これにかかれば訳もわからぬままいくらもせぬうち

にくつついてしまいが、今となつては覆水盆に返らず」とあるように、男女がくつつくさまにも用いられる。ここでは表は荔枝、裏では安祿山と楊貴妃のことをいっているのであらう。○錦橙蜜……第一折【寄生草】の注で述べたように、寧本が改める「金橙」の方が一般に用いられる語であり、【寄生草】の場合は構成から見て「金橙」の誤りである可能性もあるものと思われるが、梅堯臣の「食橙寄謝舍人」詩に「洞庭朱橘未弄色、襄水錦橙已變黃（洞庭の朱いミカンはまだ色づかぬが、襄水の錦のような橙はもう黄色く変わった）」とあり、また曲牌にも【錦橙梅】があることから考えて、ここは「錦橙」でよいであらう。「揚州夢」（古名家本）第一折【油葫蘆】の「酌幾盃錦橙漿洗淨談天口。折一枝碧桃春占定拿雲手（数杯ダイダイの汁を汲んで、大いに論じる口を洗い、一枝の碧桃の花を折って、雲をもつかむ手に持つ）」など、元曲には他にも用例がある。○忍辱波羅蜜……六つの波羅蜜（梵語パラミータ）の音訳。悟りに至るための行の（一つ）の一つ。屈辱などに耐えて心を平静に保つこと。明代のものが、李贄の「得上院信」詩に「世事由来不可論、波羅忍辱是玄門（世間のことは元来あれこれいうことはならぬもの、我慢の修行が悟りへの道）」とあり、戯曲では、やはり明代のものになるが、『精忠記』「誅心」に「我只得忍辱波羅蜜、這的是念彼觀音力（やむなくじつと我慢するばかり、これぞ観音様のお力を念ずと申すもの）」と見え、じつと耐えることを意味するようである。通常は「波羅蜜」と表記されるが、「波羅蜜」とする例も多く、必ずしも徐・寧本のように改める必要はない。ただ、ここでは甘い飲み物と関連させて出てくるので、「蜜」を掛けている可能性がある。

すると「波羅」はパイナップルを指すことになり、表面的には「忍辱」は単なる「波羅蜜」の枕詞だが、裏では「屈辱的な秘密」という意味をこめているのであらう。

〔訳〕「正末が宮殿を出るしぐさ」「外が引きとめる」「外が荔枝を持って登場」「外が正末に食べるよう求めるしぐさ」「末がもの（楊枝の類？）を手にして刺すしぐさ」「いう」私はもともと一つ（＝一人）を刺すうと思つたのだが、あんたの二つ（あんた方二人）を一緒に刺してしまった。

べつたりくつついて離れようとせず、いい加減ではつきりしない（とほけたふりでいかかわしい振る舞い）。玉枝の漿、白蓮の酒、錦橙のにごり酒にもまさろうが、天子さまはさらにパイナップルの蜜をつけて召し上がるのだ（屈辱的な秘密に耐えることになるのだ）。

【鮑老兒】若是忔摸定舌尖上度与喫。更壓着王母璠（蟠）桃會。更做果木叢中占了第一。量這厮有多少甜滋味。壓着商川甘蔗、番（鄱）陽童眼、杭地楊梅。吳江乳橘、福州橄欖、不如魏府鵝梨。

〔校〕○忔……寧本は後に「搭」を補う。○璠桃……各本とも「蟠桃」に改める。○番陽……各本とも「鄱陽」に改める。

〔注〕○忔……『漢語大詞典』は「喜愛」という意味としてこのくだりを引くが、他に同様の例はなく、「忔戲」が楽しいという意味になるが、これも含めて多くは「可」と同じように用いられているようである。寧本のように一字補って「忔搭（擬態語。がちつと）」とすると通りはよいが、根拠に欠ける。よくわからないが、とりあえず強

調する語と見なして訳しておく。○甜味……張衡「南都賦」に「酸甜味、百種千名（甘いものや酸っぱいものや、おいしいものが、おびただしい種類）」とあるのを踏まえるか。○乳橘……宋の韓彦直の『橘錄』巻中に「乳橘」の項があり、「乳橘狀似乳柑、且極甘芳得名（乳橘は、形が乳柑に似ており、非常に甘くかぐわしいことで名高い）」とある。○魏府鵝梨……元の王禎『農書』卷九「梨」に「愚按今魏府多産鵝梨（筆者が思うに、いま魏府では多く鵝梨を産する）」と見え、元代に魏県（大名）の梨が知られていたことは事実のようであるが、ここでは安史の乱において安祿山を破ることになる名将李光弼を暗示している。李光弼は後に魏國公の爵位を与えられた。つまり李白は安祿山の未来を予言していることになる。

〔訳〕もしもしつかと抱きしめ、舌の先で動かして味わえば（びつたりと抱き合って舌の先で口移しに食べさせれば）、西王母の蟠桃會の桃の味にもまさろうぞ。たとえ果物の中で一番であろうと、たかがこやつごとき何のうまみがあるか。商川の甘蔗、鄱陽の龍眼、杭州の楊梅、呉江の乳橘、福州の橄欖にまさろうが、魏府の鵝梨には及ぶまいぞ（諸将にはまさろうが、李光弼には及ばず、減ばされることとならう）。

〔觀旦科〕

【哨遍】兩葉眉兒頻擊（繫）蹙。瑣（鎖）青嵐一帶驪山翠。香靄暗宮圍（闌）。子是子孫司里酒病花豔。子爲个肥肌体。把錦幃綉幄、幔幙垂廉（簾）、做了張蓋世界的宛（鴛）央（鴛）被。這張紙於官不利。

作云（雲）幃斜掩、霧帳低垂。那里是遮藏丑事護身符、子是張發路（露）私情樂章集。看你執棧慙慙、捧硯區（驪）馳。脫靴面皮。

〔校〕○擊蹙……徐・寧本は「擊」を「系」に改める。鄭本は「擊」を韻字とするが、校記で「擊蹙」の二字については不明とする。○瑣……各本とも「鎖」に改める。○宮圍……徐・寧本は「宮闌」に改める。○廉……各本とも「簾」に改めるが、校記は付されていない。○發路……各本とも「發露」に改める。○瓊……各本とも「蓋」に改める。事実上の通用字であるためか、校記はない。○區……各本とも「驅」に改める。

〔注〕○擊蹙……「擊」と「繫」は字形が似ており、徐・寧本に従って「繫」（徐・寧本は簡体字のため「系」）に改めるべきであろう。○鎖青嵐……明の鄭岳の「送劉克柔之任南鴻臚」詩に「鍾山葱鬱鎖青嵐、拄笏登臨路舊諳（鍾山うっそうと茂る中に霧気を閉じこめ、笏を持って登れば道はかねて承知の通り）」と見え、定型表現になっていたようである。初二句は楊貴妃の不機嫌を意味するものである。○子孫司……東嶽七十二司の一つで子授けの神として知られる。元の王禎「汴梁路城隍廟記」（『秋澗集』卷四十）に「遂重修正殿臺門、創建獻廡、子孫司及道衆寮舍齋厨、輪奐一新（そこで正殿と門を重修し、回廊を初めて建て、子孫司と道士たちの宿舍や厨房、すべてきれいに新しくなった）」と見える。こゝも安祿山との義母子關係を暗示しているよう。○酒病花豔……『歸潛志』卷十「先是蔡丞相伯堅亦嘗奉使高麗、爲館妓賦石州慢云……曉來一枕餘香、酒病頼花醫却（以前に丞相の蔡伯堅も高麗に使者として赴いたことがあり、宿舍の妓女のために『石州慢』

を作ったことがある。その歌詞にいう。「……夜明けには枕に残り香が満ち、二日酔いは花のように美しいお医者様に癒やしてもらおう」とあるのを踏まえているものと思われる。○這張紙……ここで何か秘密を暴露するような紙が出てくるものと思われるが、詳細は不明。後の内容から考えると、何か李白を買収しようとするようなものではないかと思われる。○樂章集……「曲江池」(顧曲齋本)第三折【滿庭芳】に「罷波娘也實拿住風月所和奸罪名。檢着這樂章集依法施行(しようがない、お母さんが逢い引きを押さえて和姦の罪を着せようつていうなら、この『樂章集』を調べておきて通りにしてもらいましょう)」と見え、男女のことは柳永の『樂章集』に基づいて裁くという言い回しがあつたようである。おそらく色恋の手本という意識があるのであろう。ここでは前述の紙が安祿山と楊貴妃の秘密を暴露する恋の証になるといふことかと思われる。○執琰慙……以下の三句のうち後の二句は、第一折【醉扶歸】の注で述べたように、それぞれ楊貴妃と高力士をさすように思われる。するとこの句は安祿山に対するものか。三人がこれまで李白に対して丁寧であつたことに免じて、暴露しないでおいてやるというのであろう。すると高力士も一味ということになる。

〔訳〕「且を見るしぐさ」

両の眉をしきりとひそめて、その中に驢山の緑の中なる青風を閉ざしておられるが、かぐわしいもやに宮殿も暗い中、ただ子授けの神様のもとにて、酒の病を花で癒やしておられますな。ただ太った体ゆえ、錦のカーテンや刺繍のとばり、大きな幕や垂らした簾をば、世界をお

おわんばかりの鴛鴦の掛け布団となされたよう。この紙はお上のためにならぬもの。雲の屏風で斜めに覆い、霧のとばりを低くめぐらしたとて、醜聞を隠す護身符などはなるはずもなく、秘事をあばく『樂章集』にはかならぬ。さあうやうやく酌をしてくれたこと、硯を捧げ持ってあたふたしてくれたこと、靴を脱がせてくれたことに免じて進ぜよう。

〔賓〕你問我那里去。

〔耍孩兒〕一頭離了鶯花地。直赴俺蓬萊宴會。碧桃間拂面風吹。浩歌声聒耳如雷。平駟風月粧詩興、倒捲江湖此酒盃。偃仰在良(銀)河内。折末冠簪顛倒、衫袖淋漓(滴)。

〔校〕○賓……寧本は「云」に改める。○倒捲……徐本は「倒卷」に改めるが、校記はない。○良……各本とも「銀」に改めるが、校記はない。○淋漓……各本とも「淋漓」に改める。

〔注〕○賓……原文は白抜き。セリフを意味する「賓白」の略である。元刊本には他に同様の例はない。元刊本で白抜きになっているのは、曲牌名を除けば、大半が「云」「唱」であるが、その他に「鐵拐李」「竹葉舟」の「詩曰」「介子推」の「正末」「替殺妻」の「正末」「且云」「待云」「題目」「正名」「氣英布」「博望燒屯」の「散場」「追韓信」の「題目」「老生兒」「焚兒救母」の「題目」「正名」などがある。○鶯花地……南宋の李曾伯の「壽遂寧李漕」三首之三に「香浮世界鶯花地、人樂春風燕麥天(かぐわしいところにある鶯と花の地、人は春風を楽しむ燕麦みのる時節)」とあり、ここでは単に繁華な地をいうようであ

るが、曲では湯舜民【一枝花】套「贈玉芝春」の【梁州】に「誰承望  
天風吹落鶯花地（あにはからんや天の風に吹かれて鶯と花の地に落ち  
ようとは）」と見えるように、「鶯花寨」「鶯花市」同様、妓楼の意で  
用いられる。○碧桃……李商隱の「曼倩詞」に「十八年來墮世間、瑤  
池歸夢碧桃開。如何漢殿穿針夜、又向窓中覩阿環（俗世に墮ちてより  
十八年來、碧桃の中で瑤池へと帰る夢を見る。何と漢の宮殿にて乞巧  
の針を通す夜、またしても窓の中で阿環を見ようとは）」とあり、周  
密『癸辛雜識』前集「玉環」に「楊太真、小字玉環。故今古詩人多以  
阿環稱之。按李義山云、十八年來墮世間、瑤池歸夢碧桃開。如何漢殿  
穿針夜、又向窓中覩阿環。荆公詩云、瑤池森漫阿環家。又云、且當呼  
阿環、乘興弄溟渤。則是以西王母爲阿環也。按西王母降漢庭、遣使女  
與上元夫人答云、阿環再拜上問起居。然則上元夫人亦名阿環耳（楊太真、  
小字は玉環。それゆえ古今の詩人には楊貴妃を「阿環」と呼ぶ例が多い。  
思うに李義山（商隱）の詩に「……」とある。荆公（王安石）の詩に  
は「広々とした瑤池のほとりにある阿環の家」といい、「まずは阿環  
を呼んで、輿に乗って大海に遊ぼう」とある。ということ、西王母  
を「阿環」といつていることになる。考えてみるに、西王母が漢の宮  
廷に降り、上元夫人のもとに侍女を遣わしたところ、答えて「阿環再  
拜してご挨拶いたします」といったとある。とすると、上元夫人も「阿  
環」という名であることになる」とある。ここでは、前の句の「蓬  
萊宴會」ともからめて、李商隱の詩を踏まえつつ、仙界のことを述べ  
ながら、裏に楊貴妃のことをひそめているのであろう。○拂面……桃  
との関係から考えて、劉禹錫の有名な「元和十一年自朗州承召至京戲

贈看花諸君子」詩（通常は「遊玄都觀」の題で知られる）に「紫陌紅  
塵拂面來、無人不道看花回。玄都觀裏桃千樹、盡是劉郎去後栽（大通  
りには世俗の塵が顔に吹き付け、花見の帰りといわぬ者はない。玄都  
觀にある桃千本、すべて劉さまが立ち去ってから植えたものだ）」を  
踏まえているのではないかと思われる。この詩は劉禹錫の南方への左  
遷の原因となったものとされており、この後李白が「貶夜郎」される  
こととも合致する。○聒耳如雷……南宋の鄭剛中「觀溪漲」（『北山集』  
卷二）に「聒耳如殷雷、聲勢殊未怪（雷の如く耳に轟くが、その音は  
おかしなものではない）」と見える。○倒捲……蘇軾の「起伏龍行」  
に「赤龍白虎戰明日、倒卷黃河作飛雨（赤龍と白虎が明日戦い、黃河  
を逆巻かせて飛ぶ雨としよう）」とあり、元好問「病中」詩に「跼嫌  
囚宇宙、渴憶捲江湖（せかせかと世にとらわれることを厭い、江湖を  
逆巻かせたいと強く思う）」とあるのを踏まえるか。本劇第二折「滾  
繡毬」にも「胸捲江湖」という表現が見える。○冠簪顛倒……桓温の  
宴席で帽子を落としたことについて孟嘉が「解嘲」した文が失われた  
ことを惜しんで補作したという蘇軾の「補龍山文」に、「將軍度量闊達、  
容此下士顛倒冠簪（將軍は度量広く、この身分とてなき身が衣服を乱  
したことをお許しくださいました）」とあり、おそらくこれを踏まえ  
て南宋の葛郊の【柳梢青】詞には、「主人許我清狂、奈酒量從來最弱、  
顛倒冠巾、淋漓衣袂、醒時方覺（主人は私に好き放題をお認めくだ  
さいましたが、困ったことに生まれつきまるつきりの下戸でございま  
して、冠頭巾もめちやくちや、衣の袖もびしょびしょ、目が覚めてやっ  
と気がつく有様）」と見える。この葛郊の詞を踏まえているのであろう。



〔訳〕「セリフ」わしがどこへ行くかとおたずねか。

妓楼の如きこの地を離れ、我が仙界なる蓬莱の宴にまっしぐらに赴くとしよう。仙界なる桃花に吹く風を顔に受け（楊貴妃が逢い引きする世俗の風を顔に受け）、大声で歌う声が耳に響く。風と月を追い立てて詩興を増し（色恋を追いかけて詩の粧いとし）、江湖逆巻くこの杯、天の川でのんびり楽しむつもり。たとい冠簪が乱れ、酒で衣服がびっしり濡れようとも。

《二云》我知道。又二（我知道）

【五煞】見沒処發付咱、便颺一声宣喚你。這場悞賺神仙罪、我閑來親去朝金闕、不記誰扶下玉梯。這俺（俺）嗜（贖）輩。鬧中取靜、醉後添愁（悲）。

〔校〕○俺嗜……徐・寧本は「俺贖」に改める。○醉後添愁……各本とも「愁」を「悲」に改め、徐本は更に「我」を補って「我醉後添愁」とする。

〔注〕○扶下玉梯……王建の「宮詞二百首」（花蕊夫人の作ともいう）の第八十首に「舞來汗濕羅衣徹、樓上人扶下玉梯。歸到院中重洗面、金花盆裏潑銀泥（一作「金盆水裏潑紅泥」）（舞って汗は薄絹の衣にしみ通り、支えられつつたかどのの上から階段を下りる。宿舎に帰ってあらためて顔を洗えば、金の模様のたらいに銀の泥がはねる）」とあるのを踏まえる。ここでは、王建の詩を意識しているとすれば、楊貴妃が覚えていないということになるが、意味が通りにくい。あるいは誰かに助けられた恩も忘れてといった事情があるのかもしれないが、

とりあえず李白自身が酔っていて記憶が怪しいという方向で訳しておく。○鬧中取靜……『五燈會元』卷十二に「鬧中取靜時如何（騒がしい中で静かにする時はいかに）」という問が二回見え、当時よく用いられた成語であつたらしい。これも李白自身のことと取って、「このわしは騒ぎのさなかで静かにしておるが、酔った後には悲しくなるばかり」とるか、あるいは楊貴妃たちのことと見るか、二通りの解釈が成り立つが、とりあえず後者で訳しておく。

〔訳〕「正末いう」わかった、わかった。

わしの始末に困り果て、一声発しておまえ（自分のこと）を召されたか。これはとんだ誤って仙人欺いた罪と申すもの、ぶらりと皇帝様にお目通りにまいるのが、さて誰に支えてもらつて玉の階をおりたのかおぼえておらぬ。この汚らわしい輩め。にぎやかな中でひっそりと逢い引きしておるが、酔いがさめれば後悔することになるぞ。

【四煞】你親上親、我鬼中鬼。无用如碧澄二（澄）綠湛二（湛）清冷（冷）水。於民只解滌塵垢、潤国何曾洗是非。水共祿山渾相類。見了些浮花浪蕊、玉骨冰肌。

〔校〕○清冷水……徐本は「清冷水」に改める。

〔注〕○親上親……身内の上にも更に身内の間柄。「調風月」（元刊本）第一折【勝葫蘆】「兼上親上成親好對門（まして身内同士の縁組みで家柄も釣り合っております）。ここでは安祿山と楊貴妃が、親子の上で夫婦関係であることを皮肉っているのである。○碧澄澄・綠湛湛……元曲には類型表現が多いが、特に似たものとしては「拜月亭」（元

刊本)第一折【混江龍】の「這青湛、碧悠、天也知人意(青く広がり、碧にはるかな天も人の気持ちを知りたもう)」がある。○清冷水……徐本が「清冷水」に改めるのは、『藝文類聚』卷三十六に引かれる嵇康の『高士傳』に「許由悵然不自得、乃遇清冷之水、洗其耳、拭其目(許由はしおたれて情けない気分になったところで、清冷の水に出合ったので、耳を洗い、目をぬぐった)」とあるのに基づくかと思われるが、南宋の張栻の「仲春有懷」五首之三に「老木高枝不可攀、玉泉飛出半崖間。如何借得清冷水、一洗瘡痍爲解顏(老木の高い枝には登ることもならぬが、きれいな泉が崖の途中から噴きだしている。どうにかして澄んで冷たい水を借りて、傷を洗い落としてにっこりしたいもの)」とあり、無理に改める必要はないものと思われる。おそらく両者はあまり区別を意識せずに用いられているのであろう。○滌塵垢……嵇康の「聲無哀樂論」に「六合之内、沐浴鴻流、蕩滌塵垢(天下の中にあつて、大いなる流れにゆあみし、汚れを洗い)」とある。あるいは、前句に同じ嵇康の『高士傳』に基づくかと思われる語が使用されていることと関連するのかもしれない。○於民・潤國……姚守中の【粉蝶兒】套「牛訴冤」の【鬪鶴鶉】に「他道我潤國于民、受千辛萬苦(その方がいわれるには、私は民のために国を富ませ、あまたの苦しみ受けている)」と見える。○水共綠山渾相類……劉秉忠の「江邊晚望」詩に「沙白江青返照紅、滄波老樹動秋風。天光與水渾相似、山面如人了不同(砂は白く江は青く照り返しは紅く、滄い波と老いた樹は秋風に動く。天の光と水はみな同じようだが、山のさまは人と同様それぞれまるで異なる)」とあるのを踏まえているかと思われる。なお、「祿山」は「緑山」

と掛けているのであろう。○浮花浪蕊……韓愈の「杏花」詩に「浮花浪藥鎖長有、纔開還落瘴霧中(移り気な花はいつもあるが、咲いたと思つたらまたいやな霧の中に落ちてしまう)」とあるのを踏まえ、蘇軾【賀新郎】詞には「石榴半吐紅巾蹙。待浮花浪蕊都盡、伴君幽獨(ザクロが半ば紅いハンカチを小さく吐きだしているかのよう。移り気な花がみな散ってしまったら、ひっそりと独り残るあなたとこ一緒しよう)」とあり、浮気者の形容に多く用いられる。○玉骨冰肌……五代後蜀の後主孟昶の「避暑摩訶池上作」に「氷肌玉骨清無汗、水殿風來暗香滿(氷の肌、玉の骨は清らかで汗もなく、水のはとりの宮殿に風が吹いて花も見えぬのに香が満ちる)」とあるのが名高い。ここは池のはとりで美女を詠んだ作ということで、水と祿山に縁があるものとして上がっているものと思われる。この詩(詞ともいう)の作者を花藥夫人とする説もあり、前句に「花」と「藥」がある点からすると、前句の連想でこの句が出た可能性が高いものと思われる。

〔訳〕おぬしは身内の上にもまた身内、わしは化け物中の化け物。役に立たぬこと深く澄んだみどりの水の如しじゃ。民のためとてせいぜいが汚れやあかをすぎ流せるだけのこと、国のため是非善悪を洗い出したことなどありはせぬ。水と緑の山(祿山)は全く似たもの同士。あるのは水面に浮かぶ移り気な花と、玉のような美女ばかり。

【三煞】太古里家不和隣里人(欺)。二(人)貧賤也親子離。不求金玉重二(重)貴。你惟情之外別無想、除睡人間揔不知。誰得來無巴臂。不曾三年乳哺、一割合肥。

〔校〕○隣里人二……鄭本は「…隣里嫌。貧賤…」とし、徐本は「…隣里欺。人貧賤…」とする。○合肥……徐・寧本は「台肥」とする。原本はどちらにも読める。

〔注〕○家不和隣里……明の楊士奇の「與東城諸姪姪孫」(『東里集』續集卷五十三)に「俗言、家不和則隣里欺。謹之、謹之(ことわざにも申すではないか、「家不和なれば近所にコケにされる」と。氣をつけよ、氣をつけよ)」と見えるほか、明の徐紘が編纂した『明名臣琬琰録』卷十一に引かれる作者不明の「參贊軍務高魏傳」にも同じ句が見え、「家不和則隣里欺」の形で広く知られることわざだったようである(徐本の校記には、今でも用いられているとある)。従って、ここは徐本のように「欺」を補うべきであろう。あるいは「欺」のかわりに置き字として「人」が書いてあったのがこのようになったか。○不求金玉重重貴……「霍光鬼諫」(元刊本)第二折【二筈】「我不求金玉重、貴、可甚兒孫个、賢(財宝持つ高貴の身)など望みはせぬが、子孫が皆立派な人間」とはとてもいえぬ」など、元曲に複数見られる成語である。「蝴蝶夢」(古名家本)第三折【滾繡毬】に「正接着陳婆々古語常言他須不求金玉重重貴、却甚兒孫个々賢(まさに陳婆婆の古語にいつもいうように……)」と見え、「陳母教子」(内府本)第一折に「我不求金玉重重貴、只願兒孫箇箇賢」とあるところから考えて、元來は陳堯佐兄弟の母の言葉と考えられていたようである。ここでは歇後語的に後の句に意味があり、「兒孫」つまり安祿山が立派な人間になるかと思えば、ということであろう。○除睡人間惚不知……「陳搏高臥」(元刊本)第三折【滾繡毬】に「貧道子得身閑心上全无事、

除睡人間惚不知(私はのんびりした身で全くひま、眠るよりほかにこの世のことは何も知らぬ)」とあり、おそらくは陳搏に関わる言葉かと思われるが、成語化して「遇上皇」(元刊本)第三折「没酒的休入衙門里。除睡人間惚不知(飲んでいない奴は役所に入るでない。眠るよりほかにこの世のことは何も知らぬ)」など多く用いられる。ここでは「睡」に男女の共寝をかけた皮肉であろう。○三年乳哺……「父母恩重經講經文」に「三年乳哺由爲可、十月懷就苦莫裁(三年乳をやるのはまだしも、十月の妊娠の苦しみは断ち切ることのできぬもの)」とあり、元曲では「焚兒救母」(元刊本)第二折【調笑令】にも「報娘恩三年乳哺(哺) 恩臨大、懷就十月情多(おつかさんの三年乳をくれた恩多く、十月妊娠した情の深いことに報いねば)」と見えるほか、『天寶遺事諸宮調』「力士泣楊妃」【快活三】には「雖不懷胎十月得分離、却有乳哺二年意(十ヶ月懐胎してや々と分娩したというわけではありませぬが、二年間乳をやったというようなことはございました)」とあり、同じく王伯成の散曲にも【哨遍】套「贈長春宮雪庵學士」の【么】に「三年乳哺、十月懷就」の語が見える。○合肥……「当然のこととして肥えている」ということか。「台」なら「お肥えになつておられる」となるが、やはりあまり自然とは思えない。仮に「合」としておく。地名と掛けた意味があるのかもしれない。

〔訳〕これはとんだ「家不和なれば近所にコケにされ、人貧しければ実の子ともお別れ」というやつじゃ。富貴などは願わずに(子が立派な人間になることを願うというが)、おまえさんはただ色恋のほかになにもなく、寝ること以外は何にも知らぬ。全くあてにならないでた

らめぶりじゃ。三年お乳をあげたわけでもないのに、まったくよく肥えおったものじゃて。

〔外末共旦云了〕〔做指祿山云了〕

〔二煞〕拈起紙筆。標（標）是實。交千年萬古傳於世。看了書中有女顏如玉，路上行人人口勝碑。兒曹《每》。晦（悔）之晚矣。歸去來兮。

〔校〕○標……各本とも「標」に改める。○是實……徐・寧本は「事實」に改める。○兒曹……各本とも後に「輩」を補う。○晦……各本とも「悔」に改める。

〔注〕○書中有女顏如玉……宋の眞宗の「勸學文」といわれるもの（本當に眞宗の作であるかは不明だが、眞宗が「勸學吟」を作ったことは『玉海』卷三十に見える）に「娶妻莫恨無良媒、書中有女顏如玉（妻を娶るのに良い仲人がいないことを残念がってはいけない。書物の中に玉のかんばせの女がいるのだから）」と見える句。『古文眞寶』巻頭に置かれるなど、元代以降は広く知られていた。また宋の兪琰の『書齋夜話』巻四には、「屬對雖小技、然亦不易。……娶妻不用求良媒、書中有女顏如玉。有名何在鐫頑石、路上行人人口是碑（対句はつまらない技術ではあるが、やはり容易ではない。……「妻を云々」「石ころなんぞに名前を刻まれるには及ばない、道行く人の口が碑と同じ）」と、多少違う形ではあるが、有名な対句を列挙した中に次句とあわせて見えることは興味深い。ここでは、未来の歴史書に楊貴妃のことが書かれることを遠回しにいうのであろう。○路上行人人口勝碑……前項で述べたように『書齋夜話』に見えるほか、『五燈會元』卷十七にも同じ対句（た

だし「口似碑」となっている）が引かれており、よく知られた成語だったようである。また元の朱晞顔（趙孟頫の作ともいう）の「水程」詩に「何須頻問程多少、路上行人人口是碑（あとどれぐらの道のりなどとうるさく聞くには及ばない。道中の旅人の口が石碑のようなもの）」とある。あるいはこの成語に基づくものか。○兒曹……ここは三字句の来るべき箇所であり、韻は必ずしも踏まなくてもよいが、各本とも押韻するものと見て「輩」を補うのであろう。徐本の校記が引くように「兒曹輩」の例は多いが、次の字が「晦」である点から考えると、「每」字を「晦」と混同して脱落させた可能性が考えられる。「兒曹每」についても「追韓信」（元刊本）第一折【後庭花】の「痛難煞兒曹每行霸道（腹立たしいのはガキどもがかい面をすること）」のような例があり、「每」である可能性の方が高いように思われる。○歸去來兮……陶淵明の「歸去來辭」の冒頭であることはいままでもないが、元刊本の中でも「陳搏高臥」第三折【滾繡毬】・「任風子」第三折【滿庭芳】に用例がある。

〔訳〕「外末が旦という」「祿山を指さしている」

紙と筆を取り、事実を書き記し、千年の後とこしえに伝えよう。書物の中に玉の如きかんばせの美女のことが書かれてあるのを見れば、人の口には戸は立てられぬことを思い知ろう。ガキども、後悔してももう手遅れじゃ。わしはもはやいとまかいじゃ。

〔尾〕没遭羅（權）李翰林、忒昏沈楊貴妃。見如今風幃中搜抱着肥兒睡。更那里別尋个杜子美。〔下〕

〔校〕○【尾】……徐本は「煞尾」とする。○遭羅……鄭・寧本は「遮羅」、徐本は「遭羅」に改める。

〔注〕○遭羅……班固の「幽通賦」に「幹流遷其不濟兮、故遭羅而羸縮（先祖のとがが後に及んでどうしようもなく、つらい目にあつてどうすることもできない）」と見えるように、つらい運命にあうという意味で古くから用いられるが、ここではよくわからない。『宋元語言詞典』は「賣査梨」と同じで、いい加減なことをべらべらしゃべるという意味とするが、他には用例をあげない。寧本は「遮羅」として覆い隠すこととする。仮に『宋元語言詞典』の方向で訳す。○杜子美……『錄鬼簿』卷下「范子英」に「因王伯成李太白貶夜郎、廻編杜甫遊春（王伯成の「李太白貶夜郎」をもとにして「杜甫遊春」を作った）」とあり、両者は関連づけて雜劇に仕組まれていたようである。しかしここで唐突に杜甫の名が出る理由はよくわからない。あるいは自分はもう退場するゆえ、後のことは杜甫に任せるということか。杜甫が「病橋」など楊貴妃を批判する詩を作っていることは確かである。そう考えれば『錄鬼簿』の記事も理解可能かもしれない。〔訳〕口先だけの李翰林に、あまりにたわけた楊貴妃様。いまもねやでおデブちゃんを抱いておやすみじゃ。さてこのうえどこに杜子美を尋ねたらいのものやら。

〔退場〕

《第四折》

《雙調》【新水令】謝你个月中人不弃我酒中仙。向浪花中死而无怨。是

清風連夜飲、幾曾漁火對愁眠。眈眈的湖水湖淵。豁達似翰林院。  
〔校〕○眈眈……寧本は「整眼」に改める。○湖淵……徐・寧本は「湖烟」に改める。

〔注〕○月中人……嫦娥のこと。『花間集』卷九に見える閻處士（選）の【浣溪沙】詞に「劉阮信非仙洞客、嫦娥終是月中人（劉晨・阮肇はまことに仙人の洞窟にいるべきものではなく、嫦娥は所詮月の中人）」と見え、『董西廂』卷一に見える崔鶯鶯を目撃した張生の詩には「月色溶溶夜、花影寂寂春。如何臨皓魄、不見月中人（月光あたりを浸す夜、花の影さびしげな春。なにゆえ皓き魂を目の前にしながら、月の中なる人は見えぬのやら）」とある。この折前半の背景になっているのは、有名な「乗酒捉月」のエピソードであろう。『唐才子傳』卷二「李白」に「白晩節好黃老、度牛渚磯、乘酒捉月、沈水中（李白は晩年黄老の道を好み、牛渚磯を渡る時、酔いに任せて月をつかまえようとして、水中に沈んだ）」とある。この伝説は早くからあつたらしく、南宋の洪邁の「容齋隨筆」卷三「李太白」に「世俗多言、李太白在當塗采石、因醉泛舟於江、見月影、俯而取之、遂溺死、故其地有捉月臺（世間の人は多くこういう。李太白は當塗の采石で、酔いに任せて長江に舟を浮かべ、月の影を見て、うつむいてこれを取ろうとして、そのまま溺死してしまった。それでその地には捉月臺があるのだと）」と述べた上で、その誤りであることを論じている。○酒中仙……杜甫の「飲中八仙歌」に「天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙（天子さまに呼ばれても舟に乗らず、わたくしは酒中の仙人でございますと自称する）」とあるのに基づく。○死而无怨……裴度の「蜀丞相諸葛武侯祠堂碑銘并

序」に「法加於人也、雖從死而無怨（人に法に基づく罰を加えても、いわれるままに死んで怨むことはしない）」とあり、以後『三國志演義』（嘉靖本）卷十「諸葛亮計伏周瑜」の「我自公道斬之、教他死而無怨（私が文句のないやり方で斬つて、奴が死んでも文句がないようにしてやろう）」など類用される。○連夜飲……徹夜で飲む、もしくは夜ごと飲むという意で用いられ、どちらであるかは必ずしも明確ではない。古く梁の元帝の「劉生」に「菊花連夜飲、竹葉解朝醒（菊の酒を徹夜で飲み、竹葉の迎え酒で二日酔いをいやす。『文苑英華』による。『藝文類聚』などは「榴花聊夜飲」とする）」とあり、元代には薩都刺の「復題平望驛」詩に「中酒不堪連夜飲、思家無奈五更前（二日酔いで毎日飲むこともかなわず、家のことを思つて夜明け前にやり場のない気持ち）」といった例があるが、それぞれもう一つの意味にとつても通じそうである。ここもどちらでも通じるように思われるが、次句との関わりから考えると夜ごとという方向か。○漁火對愁眠……張繼「楓橋夜泊」の「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠（月は沈み烏は啼いて霜が天に満ち、愁わしい眠りと向かい合うのは川のほとりの楓と漁り火）」に基づく。この詩が人口に膾炙していることはいうまでもないが、元曲においても「青衫泪」（古名家本）第二折【二煞】の「不見他青燈黄卷。却索共漁火對愁眠（あの人の青いともしびのもと書物広げる姿は見えず、漁り火ともに愁いいだいて眠るばかり）」など、しばしば用いられる。○眈眼……『漢語大詞典』は「眼看」の義とするが、用例として引くのはこの箇所である。ただ「伍員吹簫」（元曲選本）第三折【石榴花】には「他將這條過頭拄杖、眈眈的又不知要怎地施爲（こ

の背丈をこえる長さの杖で、見ている間にさて何をするのやら）」とあり、見ることに違いはないものと思われる。○湖淵……「湖淵」の用例は見あたらない。『武林舊事』卷三に引く兪國寶の「風入松」詞に「畫船載得春歸去、餘情付湖水湖烟。明日重扶殘醉來、尋陌上花鈿（屋形船に春を乗せて帰り行き、余情は湖の水と霧とに託そう。明日は改めて二日酔いをおして来て、道に落ちた花鈿を捜すでしょう）」とある。この詞が第二折【叨叨令】でも踏まえられており、同所の注で述べたように白話文学の世界では非常に有名なものであることを考えれば、ここもこの詞を踏まえた「湖烟」の誤りと見るべきであろう。

〔訳〕 ありがたや月中のお方、この酒中の仙をお見捨てなきこと。波しぶきの中に死んだとて怨みはない。清風に吹かれ夜ごと酒を飲み、漁り火の前にして愁いを心にまどろんだこととてありはせぬ。眺めやれば湖にひろがるのは見渡す限りの水と霧、翰林院にいるよりはずつと心は晴れ晴れとしておる。

【駐馬听】 想着天子三宣。翠袖双扶不上舡。不如素娥捧勸。巨甌一飲倒垂蓮。爲楊妃味竜庭夫乃婦之天。釣風波口似鈎和線。雖然在海角邊。舉頭日近長安遠。

〔校〕なし。

〔注〕 ○天子三宣……何度も天子のみことのりをうけることであろう。「青衫泪」（古名家本）第二折【滾繡毬】「道不得可憐而見、他又不會故違着天子三宣（かわいそうではありませんか、わざと天子さまのみことのりに背いたわけでもないものを）。○翠袖双扶……南宋の向子

諷の【南郷子】詞に「一面倒金壺。既醉仍煩翠袖扶（金の酒壺傾けて、酔ったからには翠の袖のお人に支えてもらわねば）」とある。○不上舡……前の【新水令】で引いた杜甫「飲中八仙歌」の「天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙」に基づくものであろう。○素娥……柳宗元【龍城錄】の「明皇夢遊廣寒宮」に「下見有素娥十餘人、皆皓衣乘白鸞往來、笑舞於廣陵大桂樹之下（下に素娥（仙女）が十人あまり、みな白い着物をまとい白い鸞に乗って行き来しながら、廣陵の大きな木犀の樹の下で笑みつつ舞うのが見えた）」とあり、玄宗がらみの単語ということ で用いている可能性がある。○倒垂蓮……杯の形。「垂蓮」は、蓮を逆にしたような形の飾りや鍾乳石のこと。歐陽修の【玉樓春】詞に「大家金盞倒垂蓮、一任西樓低曉月（みな蓮の形の金杯を傾けて、西の高殿に暁の月が沈もうがままよ）」、蘇軾「二月十九日携白酒鱸魚過詹使君食槐葉冷淘」詩に「暫借垂蓮十分盞、一澆空腹五車書（まずは蓮をかたどるたつぷり入る杯を借りて、空っぽの腹の中なるあまたの書物にそそいでやろう）」とあり、【金盞倒垂蓮】という詞牌もある。○龍庭……ここでは朝廷のことと思われる。通常詩文では「龍庭」は匈奴の本拠地、転じて北方民族の拠点を指すが、劉禹錫の「送李策秀才還湖南因寄幕中親故兼簡衡州呂八郎中」詩に「復有衡山守、本自雲龍庭（更に衡山の長官は、宮廷から出てきた人）」と「雲龍庭」の形で見え、王禹の「西京謝上表」には「乍遠龍庭、初臨龜洛（にわかに朝廷を離れ、洛陽に到着したところですよ）」とあって、次第に朝廷の意味でも用いられるようになったものと思われる。「陳搏高臥」（元刊本）第三折【衰秀求】には「因此上將竜庭御宝皇宣詔、《云》駕賜衣冠、道号希夷（そ

れゆえ朝廷の御璽あるみことのり賜つて、「いう」みかどより衣冠を賜り、希夷という道号を頂戴した）」と見える。○夫乃婦之天……【文選】卷十六に収められた潘岳「寡婦賦」の序の「少喪父母、適人而所天又殞（幼くして父母を失い、嫁いだ後には天とも頼む人が亡くなつた）」という句に付された李善の注に、「喪服傳曰、父者子之天、夫者婦之天（喪服傳にいう。父は子の天、夫は妻の天である）」と見える。南宋の俞德鄰の「劉媪搏虎圖詩序」の「雖然夫者婦之天也。父者子之天也。君者臣之天也（とはいへ夫は妻の天である。父は子の天である。主君は臣下の天である）」以下、元明期にはしばしばこの語が用いられている。○釣風波……張炎【風入松】詞「題蔣道錄溪山堂」に「綠蓑青笠玄眞子、釣風波、不是眞閑（緑の蓑に青い笠の玄眞子（唐の張志和のこと）は、風波の中で釣りをしているが、本当にのんびりしているわけではない）」と見える。トラブルを抱えるといった比喩的な意味があることはいうまでもない。○日近長安遠……【世説新語】「夙惠」に「晉明帝數歲、坐元帝膝上。有人從長安來……因問明帝、汝意謂長安何如日遠。答曰、日遠。不聞人從日邊來、居然可知。元帝異之。明日、集群臣宴會、告以此意。更重問之、乃答曰、日近。元帝失色曰、爾何故異昨日之言邪。答曰、舉目見日、不見長安（晉の明帝が数歳の時、元帝の膝の上にすわっていた。長安から来た人がいて……ついでに明帝にたずねた。「長安とお日様とどっちが遠いかな」。答えるには「お日様の方が遠いよ。お日様のところから来た人は聞いたことがないから、ちゃんとわかるよ」。元帝は感心した。翌日、臣下を集めて宴会を開き、このことを告げて、またもう一度たずねると、何と「お日様

の方が近い」と答えた。元帝が顔色を変えて、「どうして昨日と違うことをいうんだ」というと、答えるには「目を上げればお日様が見えるけど、長安は見えないもの」と見える故事に基づくが、通常は都が遠いことを意味する。『西廂記』（弘治本）巻一第一折【點絳脣】、つまり最初の曲に「望眼連天。日近長安遠（はるか天のかなたを望めば、お日様は近く長安は遠い）」とあるのが名高い。

〔訳〕 思えば天子様より三度みことのりを賜って、翠の袖の美女が両脇支えてくれても船には乗らなんだものじゃ。こうして月中の嫦娥が杯をささげて勧めてくれる大杯を、一息に飲んで運かたどった杯を空けるには及びもつかぬて。楊妃が宮廷の目をくらませて、「夫は婦の天」というおきてを踏みにじったがゆえに、とんだ災難釣り上げてしまった。まこと口は災いの元。今やこうして僻遠の地にあつて、頭を挙げれば日は近く都ははるか彼方。

〔云〕 我想此処、却不強如与他每鬧二（鬧）炒（炒）二（炒）地。

〔沈醉東風〕 恰離了天子金鸞殿前。又來到農家鶯（鸚）鵲洲邊。自休管（官）。從遭貶。早通流了水地三千。待交我蓑笠輪（輪）竿守自然、我比姜太公多來近遠。

〔校〕 ○金鸞殿……徐・寧本は「金鑾殿」に改める。○農家……寧本は「農家」に改めるが、校記は付していない。○鶯鵲洲……各本とも「鸚鵲洲」に改める。○管……各本とも「官」に改める。○輪竿……各本とも「輪竿」に改める。

〔注〕 ○金鸞殿……必ずしも「金鑾殿」に改める必要はない。第一折【云】

の注を参照。○農家鸚鵲洲……「楚昭王」（元刊本）第三折【三煞】に「或是道家菴觀藏、或是僧家寺院里居、着莫農家鸚鵲洲邊住（道家の道觀に隠れるか、僧家の寺院に居るか、それとも鸚鵲洲のほとりの農家に落ち着くか）」と見え、この箇所が付した徐本の校記は、「太平樂府」巻一に見える白無咎の【鸚鵲曲】小令の首句に「農家鸚鵲洲邊住（わたしは鸚鵲洲のあたりに住む）」とある。本曲はこの句を用いて、「農家」を「農家」に改め、前の道家・僧家と対にしたのである」と述べる。白無咎の散曲は漁師をうたったものであり、この前後の状況とも合致する。なお鸚鵲洲は後漢の禰衡が黃祖に殺されたところとして知られ、胡曾【詠史詩】「江夏」でも「黃祖才非長者儔、禰衡珠碎此江頭。今來鸚鵲洲邊過、唯有無情碧水流（黃祖の才は長者のうちに入るものではなく、禰衡はこの江のほとりで珠の如き身を碎かれた。いま鸚鵲洲のあたりを通りかかれば、無情の碧の水が流れるのみ）」とある。ここでは李白を禰衡になぞらえる意識もあると見るべきであろう。○遞流……『太平廣記』卷百六十の「秀師言記」に「有驛通流人至州、坐洩宮内密事者（馭に、宮中の密事を漏らしたという罪で配流されて州まで来た者がいた）」とあるように、配流すること。○蓑笠輪竿……北宋の徐積の【漁父樂】詞に「漁唱歌、醉眠斜、輪竿蓑笠是生涯（漁歌が終わり、酔って眠ると体は斜めに、釣り糸と竿に蓑と笠がたつきの種）」とあるように、「輪」は各本に従って「輪」に改めるべきであろう。ただ「輪竿」という表記が定着していたのか、同じ元刊本の「竹葉舟」でも第三折【哭皇天】に「準備下笠笠輪竿釣舟」と見える。



〔訳〕「いう」思うにこは、奴らとがやがや言い争っているよりはずつとまし。

天子の金鑾殿を離れたかと思うと、今度は人里離れた鸚鵡洲へとやって来た。官を退き、左遷されてから、この三千里にわたって広がる水沢の地へと流されたからには、蓑笠に釣り竿をもつて無為自然の境地を守ることとすれば、かの太公望よりもはるかに浮世離れしよう。

〔沽美酒〕他被窩兒里猷利便。枕頭上納陳言。義子賊臣掌重權。那里肯舉善薦賢。他當家兒自遷轉。

〔校〕なし。

〔注〕○猷利便……政策などを上申して、その有利な点を述べること。南宋の黄震の『黄氏日抄』卷七十一「權華亭縣申嘉興府辭修田墜狀」の「自小人妄猷利便、將泄水之地、塞爲沙田（小人がでたらめに利点を述べて、水を排出する場所をふさいで田畑にしてからというもの）」など。元曲の例としては、他に「趙氏孤兒」（元刊本）第一折「醉中天」  
「我若猷利便圖名分。便是安自己損他人（わしがもし上の人に好都合なことを申し上げて出世を図ろうとすれば、わが身を安んじるために他人を損なうことになる）」があり、ここでは趙氏孤兒を密告する行為を指すが、先の例と本質的な差があるわけではない。○舉善薦賢……許衡の「語録」（『魯齋遺書』卷二）に「古人舉善薦賢、不敢自名。欲恩澤出於君也（昔の人は善人を推挙し賢人を推薦する時、自分の名は出さなかつたものだ。恩沢が主君から出る形にしたかつたからであ

る）」とあり、明初には『性理大全』などに収められていることから考えて、よく知られていたようである。あるいはこの語を踏まえるか。

○當家……ここでは自身のことであろう。唐の張鷟の『朝野僉載』卷五の「犯國法、師德當家兒子亦不能捨、何況渠（國法を犯したとあれば、このわし（婁師德）自身の子でも許すわけにはいかんのじゃ。ましてあいつなんぞは）」以下、例は多い。○遷轉……昇進すること。『論衡』「初稟」の「仕者隨秩遷轉、遷轉之人或至公卿（仕官する者は俸給が上がるにつれて昇進していき、昇進した者の中には大臣にまで至る例もある）」以下、用例は多い。元曲でも「霍光鬼諫」（元刊本）第二折「上小樓」  
「打這廝才低智淺。怎消的隨朝遷轉（この才も智もない奴をぶん殴るのです。昇進させる要などありません）」など用例多数。

〔訳〕奴は布団の中で利点を進言し、枕の上で意見具申しおる。義子の賊臣めが權勢握りおつて、すぐれた人材推挙しようはずもなく、自分が出世するばかり。

〔太平令〕大唐家朝治里竜蛇不办（辨）。禁幃中共猪狗同眠。河洛間途俗皆現。日月下清潭不變（辨）。把謫仙盛貶。一年。半年。浪淘尽塵埃滿面。

〔校〕○朝治……徐本は「朝野」に改める。○禁幃……徐本は「禁閨」に改める。○途俗皆現……徐本は「途俗皆見」、寧本は「圖書皆現」に改める。○不變……各本とも「不辨」に改める。○盛貶……寧本は「贖貶」に改める。

〔注〕○朝治……第二折冒頭のセリフの注を参照。○龍蛇不辨……敦

煌變文「捉季布傳文」に「昔時楚漢定西秦、未辨龍蛇立二君（昔楚漢が西秦を攻略した時、龍と蛇の区別が定まらぬまま二人の君が立った）と見える。○猪狗同眠……「青衫泪」（古名家本）第二折【滾繡毬】に「往常我春心寄錦箋。離情接斷絃。風流煞謝家庭院。到如今割地教共猪狗同眠（むかしは私は春の思いを錦の箋に寄せ、別れの思い抱きつつ断たれた絃をまたつなごうとして、妓楼で粹の限りを尽くしていたものを、今となつては豚や犬の類と一緒に寝ろといわれるなんて）」と同じ表現が見える。当時の類型表現か。○禁幃……「禁闈」であれば、『後漢書』列傳五十一「周舉傳」に「在禁闈有密靜之風（宮中では寡黙で静かであった）」など、宮中を指す用例が多い。「禁幃」については用例が見あたらないが、宮中の寢室のカーテンということの意味は通る。仮に原文のままで訳しておく。○途俗皆現……よくわからないが、徐本のように「皆見」として、道行く人もみんな知っているのと取るのが妥当か。あるいは「途俗」を風俗のことと取って、下品な風俗があらわれていると取ることも可能かもしれない。寧本は「河洛」との関連から「河圖洛書」のこととして「圖書」に改めているものと思われる。この場合は「怪しげな予言の書が現れた」ということになり、その可能性も十分考えられるが、とりあえず原文を尊重して徐本の方向で解釈しておく。○清渾不辨……「風光好」（古名家本）第三折【三煞】に「賤妾煞不識高低、不知遠近、不辨賢愚、不別清渾（わたくし高低もわからず、遠近も知らず、賢愚もわきまませず、清濁も区別できず）」という例がある。○浪淘盡……有名な蘇軾の【念奴嬌】詞「赤壁懷古」に「大江東去、浪淘盡、千古風流人物（大江は東に流れ去り、古今の

すぐれた人物をことごとく流してしまふ）」とあるのに基づく。○塵埃滿面……やはり蘇軾の「和子由次王鞏韻如囊之句可爲一嘆」詩に「欲挹天河聊自洗、塵埃滿面鬢眉黃（天の川を汲んでちよつと洗いたいの、顔中ほこりまみれで鬢も眉も黄色い）」とあるのに基づくかと思われる。

〔訳〕大唐の朝廷では龍と蛇との区別もつかず、禁中の寢室では豚や狗のような奴と一緒に眠る始末。河洛の辺では誰でも知っている有様なのに、日月のもと（宮中のことか）では清濁の区別もつかぬ。この謫仙をむざと流しものにしてくれたが、一年半のうちに、おかげで俗世の塵にまみれた顔はすっかり洗い尽くされた。

〔云〕小生終日与酒爲念。

【殿前權】酒如川。鷺鷥長聚武陵原（源）。兪央（鴛鴦）不鎖黃金殿。綠蓑衣帶雨和烟。酒里坐酒里眠。紅蓼岸黃芦堰。更壓着金馬門瓊林宴。岸邊學淵明種柳。水面學太乙浮蓮。

〔校〕○爲念……徐・寧本は「爲命」に改める。○武陵原……各本とも「武陵源」に改める。○兪央……各本とも「鴛鴦」に改める。

〔注〕○与酒爲念……徐・寧本が「爲命」に改めるのは、蘇軾の「濁醪有妙理賦」に「伊人之生以酒爲命（人の人生は酒を命とし）」とあることに基づくかと思われるが、「與」が「以」と同じ意味になるかは疑問である。原文のままでも意味は通るので、とりあえず原文に従って訳す。○酒如川……『藝文類聚』卷七十二「食物部・肉」に「左傳曰、晉侯曰、有酒如川、有肉如坻（『左傳』にいう。晉侯がいうには、酒

は川のように、肉は丘のように」と見える（現行の『左傳』昭公十二年には「有酒如淮」とある）。杜甫の「城西陂泛舟」詩に「不有小舟能盪漿、百壺那送酒如泉（權を動かす小舟がなくて、百の酒瓶があるうと泉のようにわき出る酒を送れようか）」とあり、「酒如川」となっているテキストもある。また耶律楚材の「過雲中贈別李尚書」詩には「誰識雲中李謫仙、詩如文錦酒如川（雲中の李謫仙どのは、詩はあやある錦の如く酒は川の如き方とは知る由もない）」とあり、「李謫仙」と対になっている点で影響している可能性が考えられよう。○鷺鷥長聚武陵原……本劇第一折【金盞兒】に「臣那里燕鶯花月影、鷺鷥水雲郷」とあった。同所の注参照。○宛央不鎖黃金殿……李白「宮中行樂詞」八首之二の「玉樓巢翡翠、金殿鎖鴛鴦」に基づく。第二折【金盞兒】にも「不爭玉樓巢翡翠、便是錦屋閉鸞風。如今宮牆圍野鹿、却是金殿鎖妃（鴛）央（鴛）」と同じ句を踏まえた表現があった。同所の注参照。また「曲江池」（顧曲齋本）第一折【寄生草】には「垂楊線怎繫錦鴛鴦、錦鴛鴦不鎖黃金殿（しだれ柳の糸がどうして錦のような鴛鴦をつなぎとめられよう。錦のような鴛鴦は黄金の殿にはとじこめられぬ）」と、こと類似した言い回しが認められる。○帶雨和烟……朱熹の「西源居士斷寄秋蘭小詩爲謝」詩に「却憐病客空齋冷、帶雨和烟遠寄來（病気の旅の身が空っぽの書齋にいるのを憐れんで、雨と霧と一緒に遠く送ってきてくれた）」とあるのに基づくか。○酒里坐酒里眠……「青衫泪」（古名家本）第二折【滾繡毬】に「只那長安市李謫仙。他向酒里臥酒里眠。尚古自得貴妃捧硯。常走馬在五鳳樓前（ただあの長安市の李謫仙は、酒の中に横たわり酒の中に眠り、それでも楊貴妃様に

硯を捧げ持っていたいて、いつも五鳳樓の前で馬を走らせていたのに）」と見える。あるいはこれを踏まえるか。○金馬門……漢代の門。横に銅馬があるため金馬門と名付けられたといい、『漢書』卷五十八「公孫弘傳」に「拜爲博士、待詔金馬門（博士に任命され、金馬門に詰めた）」とあるように、皇帝の諮問を待つ者が待機する場所であった。李白の「古風」其三十三に「擾擾季業人、鷄鳴趨四關。但識金馬門、誰知蓬萊山。白首死羅綺、笑歌無休閒（騒々しい末世の人々は、鷄の声とともにあちこちにかけて回り、金馬門のことしか頭になく、蓬萊山など知りもせぬ。白髪頭になって綾絹にくるまって死ぬまで、笑い歌つてのんびりするということもない）」とあるのを踏まえるか。○瓊林宴……科擧合格者に皇帝が賜る宴。詞牌に「宴瓊林」がある。○淵明種柳……いうまでもなく陶淵明「五柳先生傳」に「先生不知何許人也。亦不詳其姓字。宅邊有五柳樹、因以爲號焉（先生はこの出身かわからない。姓名も不明である。家の側に五本の柳の木があるので、それを号としたのである）」とあるのに基づく。○太乙浮蓮……『茗溪漁隱叢話』前集卷五十三「韓子蒼」に「李伯時畫太一真人卧一大蓮葉中、手執書卷仰讀、蕭然有物外思。韓子蒼有詩題其上云、太一真人蓮葉舟、脫巾露髮寒颼颼。……（李伯時「公麟」は、太一真人が大きな蓮の葉に横たわり、手に書物を持って仰向けに読むさまを描いたが、浮世離れた了の雰囲気を持っていた。韓子蒼（駒）がその上に詩を題しているには、「太一真人は蓮の葉の舟に乗り、頭巾を脱いで髪をあらわにすれば寒々と風が吹く。……）」とあり、韓駒の『陵陽集』卷一に「題王内翰家李伯時畫太一姑射圖」二首之一として収められている。その

後も元好問「太乙蓮舟圖三首」などの例があり、画題として固定していたようである。

〔訳〕「云う」わしが一日中思うのは酒のことばかり。

酒は川のように尽きることなく、鷺や鷗はいつも武陵源に集まり、鴛鴦も金殿に鎖されることとてない自由の身、緑の蓑は雨ともやしっとり濡らして、酒の中に坐し、酒の中に眠り、紅く色づいた蓼の岸べ、黄色い蘆の生うる堰といった眺めは、金馬門や瓊林の宴にまさること格段。陶淵明にならつて岸辺に柳を植え、太乙真人をまねて水面に蓮の葉を浮かべて舟としよう。

【甜水令】鬧二（鬧）吵二（吵）、懼二（懼）喜二（喜）、張筵開宴。送到楊柳岸古堤邊。正稚子妻兒、痛哭啼、牽衣留恋。早解攬（攬）如烟。〔校〕○稚子……寧本は「稚子」とするが、校記もなく、単なるミスプリントかと思われる。○解攬……各本とも「解纜」に改める。

〔注〕○楊柳岸古堤邊……柳永の【雨霖鈴】詞の名句「今宵酒醒何處、楊柳岸曉風殘月（今宵酒はどこで醒めることやら、柳の岸辺に曉の風吹き消えゆく月のもとか）」に基づくか。○妻兒……文言では通常妻と子のことを指すが、ここでは「稚子」と並んでおり、妻のことであろう。元曲にはこの例が多い。「魔合羅」（元刊本）第二折【刮地風】「眼盼又（盼）的妻兒音信杳。急煎又心癢難揉（揉）（待ち望めど妻からのしらせはなく、心焦つてかゆいところに手が届かぬ思い）」など。○牽衣……李白の「別内赴徵」三首之二に「出門妻子強牽衣、問我西行幾日歸（出ようとすると妻子が無理に衣を引っばつて、たずねるに

は「西への旅のお帰りはいつ）」とあり、杜甫の有名な「兵車行」にも「耶孃妻子走相送、塵埃不見咸陽橋。牽衣頓足攔道哭、哭聲直上千雲霄（父母妻子が追いかけてながら見送り、ほこりで咸陽橋も見えはせぬ。衣を引っばり足踏みして道をふさいで泣き、泣き声はまっすく天にも届かんばかり）」といった例があるが、いずれも古楽府「東門行」の「拔劍出門去、兒女牽衣啼（劍を抜いて戸口から出ようとすれば、子供たちは衣を引っばつて泣く）」に基づくものである。○如烟……陸游『入蜀記』卷三に「故語云、下江者疾走如烟、上江者鼻孔撩天（だからこういうことわざがある。「江を下る者は大急ぎで行き、江を上る者は鼻の穴を天に向けて偉そうにする）」とあり、『幽閨記』（容與堂本）第七齣【前腔（好花兒）】に「莫不是隱身法術似神仙。走如烟。眼尋穿（もしや神仙のように隠し身の術でも使えるのか、どこかに行つてしまつて、穴の空くほど捜すばかり）」と見える点から見ても、たちまち消え失せることかと思われる。

〔訳〕がやがやと、わいわいと、宴を開き、楊柳の岸、古びた堤のあたりまで送り来れば、幼い子や妻は、泣き叫び、衣を引いて別れがたいありさまなれど、はやとも網解いてたちまち立ち去つたものであった。

【折桂令】一時間趨篷箔順水推缸。不比西出陽關、北侍居延（延）。幾時得爲愛青山、住東風、懶着吟鞭。流落似守汨（汨）羅、獨醒屈原。飄令（零）似浮泛（泛）浮。槎沒興張翥。納了一紙皇宣。撇下滿門良賤（賤）。對十五嬋娟。怎不凄然。他每向水底天心、兩下里團圓。

〔末虛下〕

〔校〕○北侍……寧本は「北使」に改める。○居延……各本とも「居延」に改める。○汨羅……各本とも「汨羅」に改める。○飄令……各本とも「飄零」に改める。○浮泛槎……各本とも「泛浮槎」に改める。○良賤……各本とも「良賤」に改める。

〔注〕○篷箔……元の李衍の「竹譜」巻五に「其半即常竹、江船篷箔多用之（半分は普通の竹で、川船の帆に多く用いる）」と見え、帆のことと思われる。○順水推缸……流れに従って船を推すということ。多くは長いものには巻かれるという意味で用いられる。「寶娥冤」（古名家本）第三折「滾繡毬」「天也做得箇怕硬欺軟。不想天地也順水推船（天も強きを恐れ弱きをいじめるか。何と天地も流れに従って船を推すとは）。○愛青山・懶着吟鞭……金の趙秉文の「嵩山道中」二首之一の「爲愛青山懶著鞭、吟詩時作鶴頭偏（青山を愛するゆえに鞭を打つのも気が進まず、詩を吟じつつ時々首を傾げる）」に基づくものである。「吟鞭」は馬上の詩人を形容する語。南宋の陳亮の「七娘子」詞「三衢道中作」に「賣花聲斷藍橋暮。記吟鞭醉帽曾經處（花売りの声は絶えて藍橋は暮れ、馬上詩を吟じつつ酔うて帽子がぶり通ったおぼえのあるところ）」など。○住東風……ここは四字句が三句くるべき箇所である。「住」の前に一字脱落があるか。あるいは「幾時得爲愛青山住東風」で一句（青山東風で四字）で、一句少ない形なのかもしれない。○独醒屈原……「楚辭」の「漁父」に「屈原曰、舉世皆濁、我獨清。衆人皆醉、我獨醒。是以見放（屈原がいうには「世を挙げてみな濁っているのに、私だけが清んでいる。みんなが酔っているのに、

私だけが醒めている。それで追放されたのだ）」というのに基づく。

○泛浮槎……筏に乗った者が河源を尋ね、天上に至る話は「博物志」「荆楚歲時記」などに見える。元來張騫とは関連のない話だったようだが、いつの頃からか付会されるようになったらしい。「苕溪漁隱叢話」前集卷十一にはこの点に関する考証があり、『荆楚歲時記』が「博物志」を引くと称してそこに張騫の名を入れたとするが、現行の『荆楚歲時記』には見えず、詳細は不明である。ただ、杜甫の「秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻」詩に「途中非阮籍、查上似張騫（阮籍のように道中で道窮まって泣いて帰るといわけではないが、いかだに乗って張騫の如き身）」とあり、盛唐期には一般化していたようである。『錄鬼簿』によれば、王伯成には「張騫泛浮槎」という雜劇があった。○沒興……つまらないということから転じて、ろくでもない目にあうこと。蘇軾の書簡「答賈耘老」の三通目に「滕元發以扁舟破巨浪來相見、出船巍然使人神聳。好箇沒興底張鎬相公（滕元發が小舟に乗って、大波を突破して会いに来てくれましたが、舟を出ると思わず背筋が伸びるような立派な様子で、あっぱれついでいない張鎬の殿といった風情）」と見える。『永樂大典戲文三種』の「小孫屠」では題目に「遭盆吊沒興小孫屠（リンチにあう不運な小孫屠）」とあり、第十九出の末尾の生と末のセリフには「只教從前作過事、沒興一齊來（これまでしでかしたことをゆえに、ろくでもないことが一度にやってくる）」と見えるが、この「從前作過事、沒興一齊來」は南曲や白話小説で頻用される成語となる。○滿門良賤……身分を問わず一家すべて。「趙氏孤兒」（元刊本）第四折「堯民歌」に「着那厮滿門良賤尽遭誅。你看我三尺

竜泉血模糊（奴めの一門悉く誅殺し、見よわが三尺の名剣血にまみれるを）」とあるように、一般には一家皆殺しという場合に用いられる。

○嬋娟……美女の形容だが、ここでは月の美しいさま。劉長卿「湘妃」

詩に「帝子不可見、秋風來暮思。嬋娟湘江月、千載空蛾眉（湘妃には会うこともかなわず、秋風が夕暮れの思いをかきたてる。美しい湘江

の月に照らされつつ、千年にわたり空しく美貌を保ち続ける）」とあり、湘江に身を投げたといわれる湘妃との連想は、李白が入水するこの場面にはふさわしい。ただ、続く句との関係からいえば、有名な蘇軾の「水

調歌頭」詞に見える「人有悲歡離合、月有陰晴圓缺、此事古難全。但願人長久、千里共嬋娟（人には悲しみと喜び出会いと別れあり、月には曇りと晴れに満ち欠けあり、昔からすべてうまくはいかぬもの、どうか人はとこしえに、千里に渡って美しい月の光をともにすることができますように）」を踏まえているのかもしれない。○末虚下……こ

こで月を取ろうとして入水するのであろう。

〔訳〕 あつという間に帆に風受けて流れに乗って船を進めれば、西のかた陽関を出、北のかた居延に使用するのは大違い。いったいいつになれば青山を愛するあまり、東風をばひきとめて、馬上にて詩を吟

じつつ進むのも億劫ということになるうか。落ちぶれたさまはさながらに汨羅の番する独り醒めた屈原の如く、さまざまさまはさながらに

筏に乗った不運な張鷟のよう。みかどより一枚のみことのり賜って、一家すべてをうち捨ててまいった。十五の美女を前にして、何で悲し

まずにおられよう。月は水底と天上それぞれで、団円遊んでいるものを。

を。

を。

〔末、仮に退場〕

〔水府竜王一齊上、坐定了〕

〔夜行船〕 畫戟門開見隊仙。听竜神細説根元。向人鬼中間。輪廻里面。又轉生一遍。

〔校〕 ○隊仙……徐本は「醉仙」に改める。○根元……徐・寧本は「根源」に改める。

〔注〕 ○ここで入水した李白は龍王に迎えられるものと思われる。○畫戟門開見隊仙……白居易の「夜歸」詩に「歸來未放笙歌散、畫戟門

開蠟燭紅（帰ってくればまだ音楽も終わっておらず、模様ある戟並べた門が開いてろうそくは紅く燃えていた）」と見えるが、おそらくはこの句を踏まえた成語が成立したらしく、『五燈會元』卷十三には「問、

如何是佛。師曰、畫戟門開見墜仙。僧後問悟空、畫戟門開見墜仙、意

旨如何。空曰、直饒親見釋迦來、智者咸言不是佛（問うには、「仏とは何ですか」。師はいわれた。「模様ある戟並べた門を開けば墜仙人が見える」。僧は後に悟空に問うた。「模様ある戟並べた門を開けば墜仙

人が見える、とはどういうことですか」。悟空がいった。「たとえお釈迦様が自ら来られるのをその目で見ようと、智者はみな仏ではないと

いうであろう」と見える。従って、ここは元来は「墜仙」が正しいのであろう。「任風子」（元刊本）第一折「天下樂」に「我却甚畫戟門

開見隊仙（おれは模様ある戟並べた門を開けば仙人の群れが見えるなどというものではない）」とあるが、脈望館抄本は「早難道畫戟門排

見醉仙」となっており、どうやら次第に原義が忘れられて、「墜仙」

↓「隊仙」↓「醉仙」と変化していったようである。ここは「隊仙」のままか、「墜仙」の誤りと見るか、難しいところであるが、とりあえず原文に従っておく。○細説根元……ことのいわれ。「碧桃花」（息機子本）第三折【呆骨采】に「告師息雷霆之怒聽分辯。聽妾身細説根縁（お師匠様、雷の怒りをお鎮めになつて説明をお聞きください。わたくしが詳しくこのいわれを申し上げるのをお聞きください。〔元曲選本は「根縁」を「根源」とする〕）、「救風塵」（古名家本）第四折の孤による「斷」のセリフに、「只爲老虔婆愛賄貪錢、趙盼兒細説根原（取り持ち婆が金に汚いがために、趙盼兒はこのいわれを詳しく説明し〔元曲選本は「根原」を「根源」とする〕〕と見える。韻の都合などで「根苗」「根由」などとされることもある。

〔訳〕「水府の龍王たちが一斉に登場、座を定める」  
画戟の門開き一群の仙人現る。龍神が細かにことの由来を説くを聞けば、人と幽霊の間、輪廻の中で、今一度転生するそうな。

【川卜（撥）棹】赴科選。跳竜門奪状元。命掩黄泉。魚跳深淵。不見九五數飛竜在天。望海門潮信遠。

〔校〕○川卜棹……各本とも「川撥棹」に改める。○信遠……鄭本は「近遠」とする。これはこの部分の原本が破れていて「信」の人偏以外はよく見えず、覆本が空格としたことに由来するものと思われる。

〔注〕○この曲は龍と水に縁のある言葉を集めて作られている。○命掩黄泉……韓師厚の妻鄭意娘の幽霊の作とされる【勝州令】詞に「可憐命掩黄泉、細尋思、都爲他一箇（あわれ命は黄泉に消えたのも、よ

くよく思えばあの人ゆえ」と見える。これは『古今小説』卷二十四「楊思温燕山逢故人」の題材となった物語に関わる詞である。この物語は『醉翁談録』『小説開闢』にも「灰骨匣」として見える古いものであり、明代に入つて『花草粹編』にも収録されている点から考えて、この詞は広く知られていたらしい。あるいはこれを踏まえているのかもしれない。元曲では「貨郎旦」（脈望館抄本）第四折【貨郎兒（元曲選本では【七轉】）の「我是个婆娘家怎救他身亡化。撲冬命掩黄泉下（私は女の身、どうしてその人が死ぬのを救えましょう。ポトンと命は黄泉に消えることとなりました）」など用例が多い。○魚跳深淵……『詩經』大雅「旱麓」に「鳶飛戾天、魚躍于淵（トビは天まで飛び、魚は淵に躍る）」と見えるが、おそらくこの句は『中庸』の「詩云、鳶飛戾天、魚躍于淵。言其上下察也（『詩經』に「トビは天まで飛び、魚は淵に躍る」とあるのは、上下が察しあうことをいうのである）」という記述により広く知られているものと思われる。○九五數飛龍在天……『周易』「乾卦」に「九五飛龍在天、利見大人（九五、飛龍が天にある。大人物に会うのに利あり）」と見える。○望海門……吳激「風流子」詞の「烟月微茫。不似海門潮信、能到潯陽（霧の掛かる月はほんやりして、海峡の潮の便りが、潯陽までも行き着ける（劉長卿「奉送裴員外赴上都」詩の「獨過潯陽去、空憐潮信迴」に基づく）のとは大違い）」に基づく。

〔訳〕科挙に赴くとなれば、龍門を飛び越え状元を奪つてみせようが、命は黄泉に果てて、魚のように深淵を跳ねるばかり。九五の數、飛龍が天に在りという天子の姿は見えず、海峡を望むも潮の知らせは遠い。

【七弟兄】偶然。見面。恕生年。那里取禹門浪急桃花片。玉溪月滿木蘭缸。錦溪露濕芙蓉面。

〔校〕○生年……寧本は「生眼」に改める。○錦溪……徐・寧本は「錦蹊」に改める。

〔注〕○恕生年……鄭本校記は「恕生」の二字は不明とする。このままなら生きていた時のことと取るしかない。寧本は「生眼」として、「眼生」がひっくり返ったものとする。あるいは同じく初対面という方向で「生面」の誤りである可能性もある。確かなことはいえないが、とりあえず無理はあるものの原文のままです。○禹門浪急桃花片……第一折【油葫蘆】に「禹門三月桃花浪」という句があった。同所の注を参照。○玉溪月滿木蘭缸……「木蘭船」は船の美称。早い例としては梁の劉孝威の「和採蓮詩」に「金槩木蘭舩、戲採江南蓮（金の槩のある木蘭の船、江南の蓮を戯れに取る）」とあり、月と結びついている例としては、許渾「夜泊松江渡寄友人」詩の「清露白雲明月天、與君齊棹木蘭船（露おき雲白き明月の空、あなたとともに木蘭の船に乗る）」がある。李白と結びついた例としては、秦觀の「擬李白」詩に「木蘭船上動江水、不覺鴛鴦帶波起（木蘭の船にて川の水に乗って行けば、やにわに鴛鴦は波を立てて飛び立つ）」とあり、この詩の初句に「芙蓉露濃紅壓枝（芙蓉に露は濃く紅の花が枝を押さえつけるように咲く）」と、この曲の末句と内容的に関わる表現が見られることから考えて、影響がある可能性があろう。更に、『唐詩紀事』巻五十三に李商隱の故事として、旅館で人々が木蘭花の詩を作っている

とところに来合わせた李商隱が、「洞庭波冷曉侵雲、日日征帆送遠人。幾度木蘭舟上望、不知原是此花身（洞庭の波は冷たく曉の日に雲差し込み、日ごとに旅の帆は遠くへ向かう人を送る。幾たび木蘭を舟から望んだことか、わが身はもともとこの花であったか）」と詠んだという見え、南宋の姚寬の『西溪叢語』巻上ではこれを李商隱の亡靈が詠んだ詩とするなど、異説はあるが、よく知られた話であったらしい。「玉溪」は李商隱の号「玉溪生」と符合し、李商隱には名高い「馬嵬」二首の作があり、次句の「錦溪」が金の杜佐の号であって、杜佐は『中州集』巻八に収められた「馬嵬道中」という詩によって知られている。以上の事実を総合すると、ここで「玉溪」「錦溪」の二語を連用しているのは、楊貴妃の死を暗示するためである可能性が浮上してくる。更に、李商隱の亡靈が詠んだ詩であれば、すでに死んでいる李白の立場とも合致する。この推定が正しければ、「溪」の連用は意図的なものであり、徐・寧本のように次句を「錦蹊」に改める必要はないことになる。また喬夢符の【慶東原】「青田九樓山舟中作」には「是神仙洞天。隔雲樹人煙。試看玉溪邊。恐有桃花片（神仙の世界か。雲の向こうに人家の煙立ちのぼる。玉の如き谷川のあたりを）覧あれ、多分桃の花びらがありましたしょう」とあり、「玉溪」と「桃花」は結びつくイメージを持っていたことが確認できる。○錦溪露濕芙蓉面……唐の儲嗣宗の「宿范水」詩に「行人倦遊宦、秋草宿湖邊。露濕芙蓉渡、月明漁網船（旅人は仕官の旅にうんざりで、秋草茂るとき湖のほとりに宿れば、露は芙蓉咲く渡し場を湿らせ、月は漁網広げる船を照らす）」とあり、以後「露濕芙蓉」という言い回しはしばしば用いられる。美



人の形容に用いた例としては、薩都刺「蘭臯曲」の「溪水潤蘭長幽芳。春溪露滴蘭葉光。美人日暮采蘭去。風吹露濕芙蓉裳（谷川の水は蘭を潤してとこしえにひそやかな香を放ち、春の谷川に露滴れば蘭の葉は開く。美人は朝な夕なに蘭を摘みに行き、風吹けば露は芙蓉の裳裾をぬらす）」がある。「長恨歌」において楊貴妃の死後に玄宗が追憶することを述べて「太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉（太液池の芙蓉に未央宮の柳、芙蓉はかんばせの如く柳は眉の如し）」とあることから考えて、「芙蓉面」とは楊貴妃のこと、それもおそらくは死後のことをさすものであろう。

〔訳〕たまさかに出会ったことゆえ、生前のことはお赦しあれ。禹門の波は激しく桃の花びら浮かぶなどという科挙のことなど知ったことではない。玉溪では月光が木蘭の船に満ち、錦溪の露は芙蓉の面をぬらしております。

【梅花酒】他雖无帝主宣。文武双全。將相双權。鸞駕齊肩。比侯門深似海、我怎敢酒量大如川。憶上元。芍藥圃、牡丹園（園）。梧桐院。海棠軒。歌舞地、綺羅筵。衫袖濕、帽簷偏。相隔着水中原。无旅店少人烟。龜大夫在傍邊。鼈相公守根前。猿（鼈）先鋒可伶見。衆水族（族）尽皆全。擺列着一園（園）圈。

〔校〕○園……二度にわたって用いられているが、前者は「園」、後者は「園」の略字である。各本とも特に校は付していない。○根前……徐寧本は「跟前」に改める。○猿……各本とも「鼈」に改める。○水族……各本とも「水族」に改める。

〔注〕○將相双權……文武の権力をともに握ること。「拜月亭」（元刊本）第四折【慶東原】に「他家里要將相双權（お父様の方では文武の権力ともに握ろうとし）」と見える。○侯門深似海……『雲溪友議』卷上「襄陽豪傑」に、崔郊の愛していた婢が于頔に売られてしまい、寒食の折に偶然婢と出会って「公子王孫逐後塵、綠珠垂淚滴羅巾。侯門一入深如海、從此蕭郎是路人（公子や王孫は権力者の後を追ひ慕い、綠珠にも似た美しい侍女は涙を薄絹の頭巾に滴らす。貴族の館は一度入ってしまえば海よりも深く、今後蕭郎は行きずりの他人も同じ）」という詩を送り、それを知った于頔の情けで再び結び付けられるという故事が見える（第三折【普天樂】の注を参照）。この語は元曲では頻用される。○酒如川……本折【殿前懽】の注を参照。○梧桐院……白居易の「長恨歌」に「春風桃李花開日、秋雨梧桐葉落時（春風に桃李が花開く時、秋雨に梧桐が葉を落とす時）」と見え、白仁甫の「梧桐雨」雜劇の題名がこれに由来することは周知の通り。なお第三折【石榴花】の注でもふれたように、『天寶遺事諸宮調』では「明皇擊梧桐」の【公篇】において「天子擊梧桐」として楊貴妃が翠盤の中で舞うことをうたっており、同様の内容が「梧桐雨」にも見えることから、両者の影響関係が問題になっている。竹村則行『楊貴妃文学史研究』（研文出版二〇〇三）「十一 元曲「梧桐雨」と明皇擊梧桐」参照。○海棠軒……『輟耕録』卷二十五「院本名目」の「院公」に「海棠軒」という演目が見える。なお、海棠も『冷齋夜話』卷一「詩出本處」などに引かれる「太真外傳」の「上皇笑曰、豈是妃子醉、眞海棠睡未足耳（上皇が笑っていわれるには、「貴妃が酔っているものか、海棠の眠りが

足りないだけのことだ」という故事を連想させる。つまり二句ともに貴妃を暗示する句といつてよい。○歌舞地……杜甫「秋興八首」其六の「回首可憐歌舞地、秦中自古帝王州（ふりかえればああ歌い舞っていたあの地、秦は古来帝王のくに）」を踏まえる。○衫袖濕、帽簷偏……元の笑話集『拊掌録』（『説郛』卷三十四下・『古今説海』卷一百十六に見える）に「歐陽公與人行令、各作詩兩句、須犯徒以上罪者。一云、持刀哄寡婦、下海劫人船。一云、月黑殺人夜、風高放火天。歐云、酒粘衫袖重、花壓帽簷偏。或問之、答云、當此時徒以上罪亦做了（歐陽が人と酒令をして、それぞれが作る詩二句の中で、徒刑以上の罪を犯さなければならぬと定めた。一人は「刀を持って寡婦にいうことを聞かせ、海に出て人の船を襲う」、一人は「月暗く人を殺す夜、風強く火を放つ日」、歐陽修は「酒は袖をねつとりと重くし、花は帽子のひさしを押さえて傾かせる」といった。ある人がたずねると、答えていうには、「こんな時には徒刑以上の罪だつて犯しちまうだろう」と見え、おそらくこれに基づくものと思われる。なお「衫袖濕」については、趙秉文の「翠微寺」二首之二に「祗怪朝來衫袖濕、不知身在翠微中（朝から袖が湿るのを不思議に思っていたが、この身が緑の中にあつたのか）」と見えるが、ここでの用法に近いものとしては薩都刺の「和題吳間京館王本中醉作竹石壁上」の「王郎酒後衫袖濕、醉眼朦朧電光急（王君は飲んだ後で袖が湿っており、酔眼朦朧として電光の如く素速い）」があり、当時よく用いられた表現のようである。「帽簷偏」については、陸游の「園中絕句」二首之一に「梅花重壓帽簷偏、曳杖行歌意欲仙（梅の花が重いので押されて帽子のひさしは傾

き、杖を引きずつて歌いつつ歩けば仙人にもなれそうな気分）」とあつてここに似る。歐陽修の句を受けているのか、あるいは歐陽修の話が後世できたもので、陸游のこの句を踏まえているのかは定めがたい。○水中原……「原」は元来黄土高原の台地状になつた地形のことだが、日本語同様に野外の空虚な空間のことをも指す。墓地を意味する「九原」、陵墓を意味する「陵原」など、しばしば詩と結びつくイメージも持つ。○无旅店……『五代史補』卷五に見える江爲の「臨刑詩」に「街鼓侵人急、西傾日欲斜。黄泉無旅店、今夜宿誰家（街路の太鼓は迫るように激しく、西に傾いて日は斜めになろうとする。黄泉には旅館もないものを、今夜は誰の家に泊まるのだろうか）」とある。この詩は、『懷風藻』卷一に見える大津皇子の「臨終一絶」以来継続して見える一連の臨刑詩の系譜に属するものだが、「無旅店」という表現が初めて見えるのは江爲のものの方である。詳しくは金文京「黄泉の宿―臨刑詩の系譜とその背景」（『興膳教授退官記念中国文学論集（汲古書院一九九八）所収）を参照されたい。同論文でも指摘するように、「薛仁貴」（元刊本）第四折【豆葉黃】には「被你个无冤家。把我來迤逗殺。黄泉无旅店、脱（晚？）天今夜宿在誰家。爺娘看二（看）上（七）十八。死限兒來時、誰与我拽布拖麻。奠酒澆茶（いとしいおまえに、未練が残つてならぬ。黄泉には旅館もなし、今夜は誰の家に泊まるのか。お父ちゃんもお母ちゃんももうすぐ七十八じやというに、死期が来たら、誰がわしのために喪に服し、酒や茶を注いでくれようか）」と、明らかにこの詩に基づく表現が認められる。

〔訳〕帝王の宣言こそなけれど、文武両道、將軍・宰相の地位を兼ね、

みかどとも肩を並べる威勢をお持ちじゃ。そのお屋敷の海より深き広  
大さに比べれば、わたくしはとても酒量は川の如しなどというわけに  
はまいりませぬ。思えば上元のみぎり、芍薬の花壇、牡丹の園、梧桐  
の中庭、海棠の軒、歌舞の地、さらびやかな宴席にて、酒で袖をぬらし、  
帽子のひさしも傾いていたものを。今では水の中なる荒野に隔てられ、  
泊まる宿とてなく、人の気配もありはせぬ。亀の大夫が傍らに、スッ  
ポンの殿は前におられて、ウミガメ先鋒の情け受けることとはなつた。  
もろもろの水の生き物勢揃い、輪になって整列す。

【收江南】可甚玉簪珠履客三千。比長安市上酒家眠。兀的不氣喘。月  
明孤枕夢難全。

〔校〕なし。

〔注〕○【收江南】……この曲牌はしばしば雙調の套数の尾声のかわ  
りに用いられるとされる。事実、ここで本来の第四折の套数は終わる  
わけではあるが、ただ、この雜劇において顯著に認められるように、  
雜劇の末尾には、本来の套数とは異なる宮調の曲を付すなど、套数の  
後に別種のことをエピソード的に付すことが多かったようであり、雙  
調は第四折に用いられることが多いことを考えると、【收江南】を単  
純に尾声の代用と見ることは妥当ではないかもしれない。○玉簪珠履  
客三千……【史記】卷七十八「春申君列傳」の「春申君客三千餘人、  
其上客皆躡珠履以見趙使（春申君の食客は三千余人、上等に分類され  
る食客はみな真珠を飾った靴をはいて趙の使者に会った）」という故  
事を踏まえるものだが、直接には李白の「江上贈竇長史」詩に「漢求

季布魯朱家、楚逐伍胥去章華。萬里南遷夜郎國、三年歸及長風沙。聞  
道青雲貴公子、錦帆遊戲西江水。人疑天上坐樓船、水淨霞明兩重綺。  
相約相期何太深、棹歌搖艇月中尋。不同珠履三千客、別欲論交一片心。

（漢は季布を魯の朱家に求め、楚は伍子胥を追放し吳の章華臺へと去  
らせた。南のかた万里の夜郎國に流されて、三年で長風沙〔池州に近  
いところにある長江の中州〕まで帰りつく。青雲の志持つ貴公子が、  
錦の帆をあげ西江の水に戯れておられるとか。さながら天上にて樓閣  
しつらえた船に乗る心地、水は清く夕焼けは明るく両者あいまつて美  
しい。私のことをどうしてかくも深く思ってくださいさるか、舟歌唱い  
船を揺らして月の中にお尋ねくださる。真珠飾る靴を履いた三千の客  
とは話が別、交わり結ぶこの心について語り合いたいもの）が、第  
四折の舞台に近い地で作られた詩であり、しかも「遷夜郎國」「月中尋」  
といった言葉が見える点から考えて、ここで踏まえられていると見る  
べきであろう。ここでは食客になれと請われて、堅苦しいのはごめん  
だと断るのかとも思われるが、この詩との関わりからすると食客など  
という分け隔てのある間柄ではない、といっているのかもしれない。  
○長安市上酒家眠……杜甫「飲中八仙歌」を踏まえる。この詩の句は  
本劇の中で再三使用されている。第一折【鵲踏枝】の後のセリフに付  
した注を参照。○孤枕……鮑照「夢歸鄉」詩に「夜分就孤枕、夢想暫  
言歸（夜ひとりぼっちで枕につくと、しばし帰郷する夢を見た）」と  
見え、以後はこれを踏まえて夢と結びつくようになる。元好問【三奠子】  
詞「離南陽後作」に「閑衾香易冷、孤枕夢難圓。西窓雨、南樓月、夜  
如年（独り寝のしとねにては香も冷えてしまいがち、一人の枕では夢

も結びがたい。西の窓の雨、南の高殿の月、一夜が一年に思える長さ」などの例があり、元曲では吳仁卿の【梧葉兒】に「春三月、夜五更。孤枕夢難成（春三月、夜明け前、独り寝の枕では夢も結びがたい）」などの多くの例がある。

〔訳〕玉の簪、真珠飾る靴の食客三千人などんでもない。長安の市にて酒場で眠ることに比べれば、何とも気ぜわしいこと、月明かりのもとと独り寝の夢結びがたし。

【后庭花】翰林才顯耀徹。酒家邊（錢）還報徹。酬了鶯花志、補完了天地缺。尋常病无些。玉山低起。不合保他短処劫（掲）。便将俺冤恨雪。君王行厮間迭。听讒臣耳畔説。既離了丹鳳闕。下江舡不暫歇。采石渡逢令節。友人將筵會設。酒盃來一飲竭。正人（夜）闌人淨（靜）也。波心中猛觀絶。見冰輪皎潔二（潔）。手張狂脚列起。探身軀將丹桂折。

〔校〕○鄭本はこの曲の前に「散場」を補う。徐・寧本では以下の二曲は二字下げとされている。○后庭花……鄭本は「後庭花」に改める（他の二本は簡体字表記のため変化なし）。○酒家邊……各本とも「酒家錢」に改める。○保……徐・寧本は「把」に改める。○劫……徐・寧本は「掲」に改める。○迭……徐・寧本は「謀」に改める。○人闌……鄭・寧本は「夜闌」、徐本は「更闌」に改める。○人淨……各本とも「人靜」に改める。

〔注〕○【取江南】の注でも書いたように、第四折の套数は前の曲で終わり、【后庭花】【柳葉兒】の二曲は套数外のものとなる。これは幕切れに置かれた「散場」と呼ばれるエピローグ的な一段なのであろう。

【研究】一八〇頁の注を参照。またここで用いられている二つの曲牌が「東窗事犯」第四折の末尾にも同じような形で見えることは興味深い。ここで現れるのは水死した李白の霊と思われるが、「東窗事犯」で登場するのも非業の最期を遂げた岳飛の霊であり、両者はともに鎮魂劇的な性格を持つものと思われる。この点については、小松謙【中国古典演劇研究】（汲古書院二〇〇一）四十六頁を参照。○酒家錢……李白の「贈宣城宇文太守兼呈崔侍御」詩に「或弄宛溪月、虚舟信洄洑。顔公二十萬、盡付酒家錢。興發每取之、聊向醉中仙（時には宛溪の月を楽しんで、よそ人の乗らぬ舟で思うがままに川を上り下りする。太守さまのくださった二十万のお金は、全部酒屋に渡して酒代にして、その気になれば取り寄せて、しばし酔仙人と向かい合う）」とあるのを踏まえるか。○尋常病……普通の病氣。『麗澤論說集録』（南宋の呂祖謙の学説をまとめた書）卷七に「且人之治病、尋常病易治（それに人が病を治す時には、普通の病は治しやすいもの）」と見える。○玉山低起……『世説新語』『容止』に、嵇康を山濤が評した言葉として、「嵇叔夜之爲人也、巖巖若孤松之獨立。其醉也、傀俄若玉山之將崩（嵇叔夜の人柄は、高々とひとり立つ孤独な松のようだ。酔ったとなれば、がらがらと玉の山が崩れようとするかのようだ）」と見え、『蒙求』にも「叔夜玉山」とある。○問迭……原文の「迭」は字体がむしろ「選」の略字である「迭」に近いが、韻字でもあり、「迭」に間違いなであろう。『董西廂』卷七【一枝花纏】に「這畜生腸肚惡。全不合神道。着言厮間謀、忒奸狡（この畜生めは根性悪く、まこと天道にかなわぬ奴。口先にて仲を裂く狡智の程もえげつない）」とある

ように、仲を裂くという意味で用いられる「間諜」と同じであろう。ただ、「拜月亭」(元刊本)第三折【倘秀才】の「那一个耶(爺)娘不間疊。不似俺、忒嗶嗶。劣缺(どこの両親も仲を裂こうとはするだろうが、うちのみたいにえげつなく猛々しい人はいまい)」のように、「間疊」という例もあり、表記は一定していないらしい点から考えて、徐寧本のように改めることはしない。○人闌人淨……前の「人」は置き字で、徐本の「更闌人靜」か鄭・寧本の「夜闌人靜」のいずれかであろうと思われるが、蘇軾の【虞美人】詞に「晚晴臺榭增明媚、已拼花前醉。更闌人靜月侵廊。獨自行來行去好思量(夜には晴れてうてなにあずまやいよいよ美しく、思い切つて花の前に酔えば、夜も更けて人も静かに月は回廊に射し込み、独り行きつ戻りつ物思い多し)」、周邦彦の【品令】詞の「夜闌人靜。月痕寄、梅梢疎影(夜も更け人も静かに、かそけき月の光は、梅の梢に身を寄せてまばらな影となる)」など、「更」[夜]ともに用例が多く、いずれが妥当かは定めがたい。ただ元曲では【西廂記】(弘治本)卷一第三折【公篇】の「霧障雲屏。夜闌人靜(霧の帳に雲の屏風、夜も更け人静かに)」など、「夜闌」の用例の方がはるかに多いことを踏まえて、仮に「夜」としておく。

〔訳〕翰林の才は存分に示しきり、酒屋のツケも払いきつた。色事の望みもかない、天地の割れ目も補つた。普通の欠点は毛ほどもないが、酒に酔い崩れるのが玉に瑕。あやつの短所を暴き立ててしもうたのはまづかつたが、わが恨みを晴らそうとしたまでのこと。奴は君王に告げ口し、佞臣が耳元でささやくのを帝は聞き入れられて、宮廷追われることとはなつた。川下る船はしばしも休まず、采石渡にて中秋のよ

き時にめぐりあい、友は宴の席設け、杯が来たれば一氣に飲み干す。夜も更け人みな寢静まつた折しも、波のただ中ふと見れば、水の輪の如き明月さえざえと輝く。手はばたばた足はよろよろ、身を乗り出して月中の丹桂をば折らんとして。

【柳葉兒】因此上醉魂如灯滅。中秋夜祿尽衣絶。再相逢水底撈明月。生冤業。死離別。今番去再那里來也。〔下〕  
〔校〕なし。

〔注〕○如灯滅……『大般涅槃經』卷九「如来性品第四之六」の「畢竟涅槃謂眞無常、猶如燈滅膏油俱盡(結局のところ涅槃とは本當の無常のことであり、さながらにともしび消えてあぶらごとごとく尽きるが如し)」など、仏典に用例多数。○祿尽衣絶……すつからかんになること。『天寶遺事諸宮調』「陳玄齡駭赦」【梁州】にも「也是楊國忠月值年災、安祿山時乖運拙、太眞妃祿盡衣絶(これも楊國忠は厄年厄月に出くわし、安祿山は時運拙く、楊貴妃はすべておしまいと申すもの)」と見えるほか、「劉行首」(古名家本)第三折【滿庭芳】の「單注着老妖精祿盡衣絶(老いぼれ妖怪はすつからかんとする定め)」という例などがある。○水底撈明月……「水中月」の比喩は、『大般涅槃經』の「故不得涅槃、喻如獼猴捉水中月(それゆえ涅槃を得ることができなければ、猿が水中の月をつかまえることができないようなもので)」など仏典にはおびただしく認められ、李白の「誌公畫讚」にも、おそらくそれを踏まえて「水中之月、了不可取(水中の月は決して取ることができない)」と見える。なお、後世この比喩は、『滄浪詩話』「詩

辯」において詩の「妙處」を説く「如空中之音、相中之色、水中之月、鏡中之象、言有盡而意無窮（空中の音、絵の中の色、水中の月、鏡中の映像のようなもので、言葉には限界があってもそこに込められたものは果てしないのである）」によって知られることになる。「撈明月」という表現の例としては、吳文英の【望江南】詞「賦畫臨照女」の「誰撈明月、海波寒天、淡霧漫漫（誰が月をすくうのか、海の波のかなたに寒々とした天、淡い霧が果てしなく）」がある。

〔訳〕 かくて酔った魂は灯火の消えるように失せ、中秋の夜にすべてを失った。再び会おうとて水底に月をすくうが如きあてどなさ。生きるは罪作り、死するは別れ。こたび去り行けば二度と来はせぬ。

〔退場〕

古杭新刊關目的本李太白貶夜郎

(二〇〇九年九月三〇日受理)

- (1) (あかまつ のりひこ 京都大学高等教育開発推進センター教授)
- (2) (きん ぶんきょう 京都大学人文科学研究所教授)
- (3) (こまつ けん 京都府立大学文学部日本・中国文学科教授)
- (4) (さとう はるひこ 神戸市外国語大学外国語学部教授)
- (5) (じゅん しゅんせい 摂南大学外国語学部教授)
- (6) (たかはし しげき 摂南大学外国語学部教授)
- (7) (たかはし ぶんじ 大阪大学大学院文学研究科教授)
- (8) (たけのうち まこと 京都外国語大学外国語学部教授)
- (9) (つちや いくこ 佐賀大学文化教育学部准教授)
- (10) (まつうら つねお 大阪市立大学大学院文学研究科教授)